が最近とみに変態でいらっしゃることについてわたしは一体どうすれば良いのか誰か教えてく

祭歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヘンゼルお義兄様が最近とみに変態でいらっしゃることについてわたしは一体どうすれば良いのか誰か教えてくださいませんか。

【Ｎコード】
Ｎ８５４２Ｔ

【作者名】
祭歌

【あらすじ】
「おいで、僕の可愛いグレーテル」とろけるような金髪にうっとりと細められた蒼の瞳。ふわりと天使のように微笑みながらお義兄様がわたしを抱き寄せてくる。あああもうなんって残念な美形！
誰かこのド変態をどうにかしてくださいっていうか助けて！　一体いつの間にうちのちょっとクールですてきなお義兄様は義妹にキスしてハグしてえんえん甘い言葉を囁き続ける変態（しかも病んでる）に成り下がってしまったのでしょうか。「うざい！　お義兄様

うざい！」どんなにどんなに叫んでも日に日に病んでる度を上げるお義兄様はまったくさっぱり構いやしない。ああもう本当にわたしは一体どうすれば良いんですか！　元ブラコン義妹と現シスコン（？）義兄の童話ぶち壊しラブコメ時々ファンタジー。お茶の間の一時でも、かるっと楽しんでいただければ幸福です。

＊名前についての言及＊（名前とかどうでもいいよ！　という方は次話よりどうぞ！

こんにちは、お立ち寄りくださってありがとうございます！
この回は名前について「え、それおかしくね？」と疑問を感じる方の為の諸注意ですので、「フィクションで名前とかどうでもいいよ！」という方はサクッとスルーして次話へお進みください。すみません！

＊名前についての言及＊（名前とかどうでもいいよ！　という方は次話よりどうぞ）

この小説は、「ヘンゼルとグレーテル」をほんっっとうに微妙に、倒錯的に下地にさせていただいております。倒錯的に！（大事なので強調してみました。ご安心ください、原作はもっと可愛くて残酷でグリムですよ！）

なので、神様とか妖精とか聖獣とかそこらへんのファンタジーな生き物はフィンランド語やらスウェーデン語がごちゃ混ぜになっとりますが、基本的に人物名はドイツ語に則っております。

そんなドイツ語名で、グリム童話でもさりげなく書かれているように、ヘンゼルとグレーテルというのは、ハンスと、グレーテもしくはマルグレーテの愛称なんですね。グレーテだろうと言われているみたいですが。つまりもっと訳すと「ハンスくんとグレーテちゃん」というわけで。

えぇと、私が聞きかじったニワカ知識によると「ｅｌ」がつくことで「ちゃん」「くん」になっているとか。となると、ハンスお義兄様、の方が良いのかなとぎりぎりまで悩んだのですが、グレーテルはグレーテルなんですね。原作でもそうですし。それにグレーテルも原作ではヘンゼルのことを呼ぶ時はヘンゼル兄さん。

また愛称として「ｅｌ」をつけるという心持ちでいくと、出てくるお友達ーズはどいつもこいつも「～ｅｌ」をつけなくちゃいけない気がしてきて、でも先生とかに呼ばれる場合は普通に、たとえば「グレーテ」になるわけで、なんだそれ読み難い！　ただでさえ家名と名前でいちいちややこしくなるのに！　という私の独断と偏見によって、この小説の中では「ｅｌ」は考えないものとします。ただ、ハンスとグレーテだと、ちょっと元ネタが分かり難いかなー、誤解生むかなー、とチキン的な考えが渦巻き、ていうかヘングレなんだからこの二人はヘンゼルとグレーテルじゃなきゃ駄目でしょ？

！　とまた勝手なことを思い、この二人のみは、愛称が名前になるタイプの「ヘンゼル」と「グレーテル」とさせていただくことをお許しください。ドイツ語名でもまんまの名前として「ヘンゼル」も「グレーテル」もありますので。英語で言う、「エリザベス」と「リズ」みたいな感じです。リズは愛称でもありますが、普通にそのまんま名前としてつけられるのもしばしばあります。

九十パーセントかの名作とは関係なくなっておりますが、名前もさりげなく原作と離れている、ということになります。いえ、まあ、そもそも、ほとんど「ヘンゼルとグレーテル」の影も形もないのですが。あくまで疑問点の為の注意書きとさせていただきました。

そのようなわけで、作中ではグレーテルは兄のことを「ヘンゼルお義兄様」と呼んでいて、初対面の人も「ヘンゼル」「グレーテル」と呼びますが、愛称としてではないことをご了承くださると嬉しいです。

ではでは、長々と苦渋の言い訳にお付き合いくださってありがとうございました。次話より本編になります。かるっと楽しんでいただければ幸いです。

ヘンゼルお義兄様について少々。

「おいで、僕の可愛いグレーテル。今日はミュランの塩焼きだよ」

うっとりするほどの美貌をこれでもかというくらい甘くゆるめたヘンゼルお義兄様は手招きしながらそっとわたしの髪をすくいあげそのまま抱き寄せるという随分器用な芸当をやってのけた。息がかかるほどの距離。わたしが衝撃でされるがままになっているからか、お義兄様は心底嬉しそうに笑った。くっそこの超人的美形男が女の敵め！　……ごほん。失礼。

ああ、お義兄様のこのあまったるい奇行は今に始まったことではないので気にしない。うざったいけど気にしません。そんなことより。

「……ミュランの……塩焼き……？」

朝っぱらからなんつう重い食事を用意しやがるのかこの義兄は。

……じゃなくて。

ミュラン？　ミュラン、って、あの、この前お父様がこっそり狩りでしとめて持ち帰ってきた、あのミュラン？　あの、今の時期ではなかなか手に入らない高級肉の？　？？？？わたしが、せっかく、お父様に勝手に馬鹿食いしないようじっくり注意してまでホクホク大事に取っておいたご馳走用のミュラン肉？！

「……お、」

「お？」

にこにことお義兄様が繰り返す。さらさらの金髪が揺れて、柔ら

かな蒼の瞳が細められる。おまえは王子様かってほどの美人っぷり。もういっそ美少女に性転換しろ世の為人の為義妹の心の平穏の為！

ぶるぶると怒りに震えるわたしの拳にはとんと気付いていらっしゃらないらしいお義兄様は当然のようにわたしの頬を両手で挟み額を近づけてくる。ぶち、と脳内で何かが切れた。その気ならこちらだって手があるんですからね！　心の中で叫び、わたしはキッとお義兄様を睨みあげる。

「お義兄様の、ばかあああああああああああ！」

ごつん！　とわたしは容赦なく自分の石頭をお義兄様の額にぶち当てた。

……何で攻撃したのにこの人は心底幸せそうに笑ってんの？！　ナニ？！　とうとう『まぞ』にでもなったわけお義兄様？！

ヘンゼルお義兄様はお義母様の前の旦那様の連れ子だ。つまり、わたしとはほとんど赤の他人ってことになる。血縁的に言って、だけど。何しろお義母様とも血の繋がっていらっしゃらないのだから、筋金入りの他人様だ。

そうは言っても家族であることには変わりない。お義兄様の義妹（いもうと）にさせていただいたのは、確か七つの頃。二つ年上のお義兄様は九

つになられたばかりだった。無垢で子供らしい女の子だったわたしは、このたいそう美しい新たな家族にとってもとっても喜んだ。それはもう、引き合わされた瞬間天使様に遭ったみたいな心地でぼーっと見蕩れるほど。骨抜きにされた。相手の反応も構わずまとわりついていた、ああ、あの、愚かしき幼い日々よ！

いやいやいや話が逸れたわ。

そう、あの頃は、まだお義兄様はまともだった。むしろ素敵で完璧で自慢のお義兄様だった。??白状します。わたしはいわゆる『ぶらこん』だった。お義兄様大好き、が口癖だった。穴があったら埋まりたい。

それがどうしてこうなったのか。

今ではお義兄様は十八歳、わたしは十六歳。さすがに兄離れもして、さすがに「お義兄様大好き」は言わなくなった。だけどその反対に、何故か、何故かお義兄様は脳みそとろけてんじゃないのってくらい阿呆な妹馬鹿に変貌してしまったのだ！　ああなんて悲劇！

主にわたしが！

そりゃあ、そりゃあお義兄様のことは好きだ。す、……いや、うん、好き、だとも。うざいけど。でもわたしが好きなお義兄様はちょっとぎこちなくて、頭を撫でてくださる手が触るか触らないかのあの遠慮深さというか、慣れていらっしゃらないもどかしさ、それからちょっとクールで表情の少ない、でもたまに見せていただける控えめな笑顔がもう本当に天使様みたいなお義兄様で????

あんな朝から抱きしめてきたりキスしてきたり髪の毛をむやみやたらと触ってきた挙句意味不明なもうどこぞのお姫様にでも言ってろよ的な美辞麗句を口走るような甘ったるいお方じゃなかったのに！

ああ、一体いつからこうなったのか。わたしが神学校に中途入学する前はまだ普通だった。なのに、気付けばこんな。

「グレーテル、ごめんね。まだ怒ってる？」

怒ってる？　と聞きながら何であなたは義妹を抱きしめてるんですかやめろ暑苦しい！

けっとやさぐれた気分で、無理矢理離れようとしてもお義兄様の力は意外に強く、なかなか逃がしてくれない。？？って、ぎゃあ！

息っ、息、わざとかけやがりましたよこの人っ？！

「だって今日からグレーテル、高等神学校の二年に上がるでしょ？朝からお祝いしたかったんだよ」

……う。

そういうお義兄様だってもうすぐ研究院にご入学ではありませんか、そちらの方がおめでたいです、ともごもご呟く。ああもう、何でそういうこと言うのかこの人は。うう、だめだめ、ほだされるもんですか。肉の恨みは深いんです！

「……それに、半日学校って言っても、また暫く会えなくなっちゃうし。グレーテル成分を朝から目一杯補給しとかないと、うっかり友達殺っちゃいそうだから」

「？？？？」

それが本音かこのド変態義兄が！　ていうか意味分かんないし！

……え？　あれ、待って？　まさか、わざわざわたしに怒られるために、お肉使った、ん、じゃ……？

恐ろしくなってそっと見上げると、お義兄様はそれはそれは麗しいお顔でふわりと微笑んだ。ウッカリ見蕩れている間に顔が近づき、

？？ちゅ、と目尻に何やら熱いものを押し当てられた。

……わーお？

さすがにここまでくるともう暑苦し過ぎて、どうしよう恥ずかしさと恐怖とお義兄様の変態加減に泣きたい。もういいから早く恋人作ってくださいマジで。

「……とりあえず、気持ち悪いですお義兄様」

「傷つくなぁ、グレーテルってば。でもいいよ、君が言うことなら何でも嬉しいからね。？？文句言ったって、僕はやめてあげないよ、可愛い可愛いグレーテル。君の目に映る全てを殺して回りたいくらい愛してる」

もうやだこのひと。

耳元すれすれで囁かれて、わたしはがっくりと項垂れた。……お義兄様。

もうイイ歳なんですから、『しすこん』は良い加減にしてください。恥ずかしい。ていうか。

……なんか、日に日に病んでってません？

お義母様の非生産的なご趣味について少々。

お義兄様も大概おかしいけど、それはお義母様も同様だ。

わたしたちのお義母様はお義兄様と血が繋がっていないことが不思議なくらい、衝撃度大の美人で、艶やかな黒髪と神秘的な紫の瞳がため息の出るほど美しい。異国風のスリットの入ったドレスを着ても何ら笑えない似合いっぷりには頭も上がらない。

でも、変。

「?????????????????ッッぁあああああッッ！」

超音波よろしく響いた奇声とともに、がしゃーん！　と窓が割れる音がする。窓。何でその場にいないのに分かるかと言えば、日常茶飯事だからだ。

きしゃああああああああ！　と次いで酷い唸り声。ああ朝っぱらからどうしてうちの家族はみんなやらかしてくれるんでしょうか。もうちょっとわたしに優しくなりませんか。慈愛って言葉知ってますか。聖書開く前から司祭様が繰り返すワード第二位ですよ。一位は神を敬え的な洗脳ですが。

「……お義兄様、真面目にどいてください。片付けて参ります」
「だぁめ。グレーテルはもうちょっと僕といちゃいちゃしようね。だいじょーぶ、たまには義父上に任せようよ」

誰と誰がいちゃいちゃしてるんですか頭腐ってんですか！　……ああ、腐ってるんだった。もういや。

はー、と盛大にため息を吐いて、お義兄様の腕の中でわたしはぶんぶんと頭を振った。それからまたぶんぶんと前後に揺り動かす。お義兄様は慌てたように腕を開いて跪いた。騎士様みたいにわたしを見上げる。？？ああ、踏みつけてやりたい。

「駄目だよそんなことしちゃあ！　グレーテルの雪花のように柔らかくて細い首が折れてしまう！」

「折れません。ちょっとどいてください」

即答してわたしは部屋の外に出て階段を上り、お義母様のお部屋に向かった。ノックもしないで中に入る。

……あああ。

目も当てられない惨状に、わたしはくらりと目眩を起こした。今日は一段と酷い。それでも気をしっかりもってお義母様に近づく。

「お、お義母様……」

「あああああああ！」

「お義母様！」

「ぎやあああ！」

はっ、しまった首を絞め過ぎた。

うっかり首にしがみつき過ぎたのをぱっと放す。げふうっと奇妙な悲鳴で喉を整えたお義母様がギロッと睨んできた。ご、ごめんなさい。

「ぐれぇえええてぇえええる！」

「ごごごごめんなさい！」

さすがに首はやり過ぎました！

「また、またわたくしの邪魔をしたねぇえええ？！　もうちょっとであの方を呼び寄せられる筈だったのにぃいいいい！　にぃいくうううういいいいい！」

そっちか！

いつものことだから諦めてくだされば良いのに。がくっと肩を落として額を覆う。指の狭間からおどろおどろしい暗黒な品々が目に入った。

部屋中に描かれた奇妙な紋様、吹き飛んだ窓、悲惨な状況の椅子その他木材もろもろ。もうもうと上がる紫と黄色と黒の微妙過ぎる煙。

錯乱し始めたお義母様に抱き上げられては思いっきりベッドに突き落とされ、という虐待以外の何ものでもない行為を繰り返されながらわたしは遠い目になった。ああ、ベッドは壊れてなくて良かった。

お義母様は破壊活動が大好きだ。

いや、これはちょっと語弊がある。かもしれない。破壊活動は大好きだけど、もっと好きなのは人様を呪ったり、『くろまじゅつ』なる怪し気な行為をすることらしい。

初めて会った時からお義母様もそれはまあ美しいお方で、わたしは舞い上がったものだけど、それも数ヶ月もすれば「このヒトやばい」と理解するようになった。うん、お義兄様と違ってこの方はぶれないわ。……むしろ軌道修正して欲しかったけど。

あとお義母様は錯乱が得意。
『くろまじゅつ』の弊害なのか何なのか、お義母様は大抵錯乱している。にたぁっと笑うともう美人台無し。それ以前の問題だけどそんなこと言及してたらわたしはこの家で生きていけない。家族の暴走を止めるのは何故かわたしの役割になっている。酷過ぎる。しすこんのお義兄様も笑顔で「僕しーらない」なんて笑って逃げやがるんだからまったく月のない晩には気をつけろ！

ともかく、こんなにけむけむしていてはまた通りがかりの親切な誰かさんが押し入ってきて騒ぎになるかもしれない。それは大変面倒なので、わたしはなんとかお義母様の手から逃れ、壊れた机の中から怪し気なタペストリーを裏返して窓に吊るし、扉を全快にした。換気が家内って……虚しい。

それから悪鬼の形相で迫ってくるお義母様のお腹にがつん！　と頭突きをした。細いお義母様はそれだけでふらっと倒れる。慣れているわたしはさっさとお義母様を助け起こし、目の前でぱんと手を叩き合わせた。
するとお義母様はハッと目を限界まで見開いて一瞬魂抜けたんじゃないかというほうけた顔になる。う、目が死んでる。死んでるよこの人！

「あ、ああ、あああ、グレーテ、ル？　わ、わたくしは」
「はい、おはようございますお義母様。お義兄様が珍しくお食事を作ってくださいましたよ」

珍しく、を強調してみた。

「そう……分かったわ……」

ふっと眸の光が消えたお義母様は、三角に垂れた唇で、陰鬱そうに頷いた。ふらふら〜、と幽霊みたいに動き始める。たぶんわたしが言った通り食事に行ったのだろう。

破壊活動から醒めたお義母様は大抵こんな感じで、妙に鬱々としている。肩は下がり、前のめりで、昏い眼差しを足許に向けてはぼそぼそ喋る。ぶっちゃけ家が壊れないのでわたしはこれはこれで良いと思うのだけど、世間様は冷たいからなんとしかないとね、とお義兄様は意見を曲げない。お義兄様は妙なところでまともだ。ぜひともわたしにもまともに接して欲しい。切実に。

ああそれにしてもお義母様は綺麗だ。女の人が美しいと心が洗われる。お義兄様がお義姉様だったらわたしの心はもっと平穏なのに。

適当にお義母様のお部屋を片付けてから、わたしは一旦自分の部屋に戻り、生成りの鞄を取って階下に降りた。ふわりとくゆる塩焼きお肉の香り。あああああもう勿体ない！　たかが朝食にミュラン肉！　歯ぎしりしながらもわたしは食卓についた。ちなみにお父様はいない。というよりお父様は大抵留守にしている。仕事で家を省みない男とかそんな情緒なもんじゃなくて、超気紛れ人間だから、いつの間にかいないだけだ。そのわりに気弱だけど。

手を合わせて食前の祈りの言葉をもごもご唱えてから、あぐっと肉を食べる。……う、美味しいけど、やっぱり朝っぱらからこんなものは重い。腹にくる。

「グレーテル、グレーテル」

む、何ですかお義兄様。わたしは今お肉を食べるので忙しいのです。

「はい、あーん」

……なに？　馬鹿にしてんの？
一瞬思考が停止した。あーん、って何年ぶり……いやいやいやよくよく考えるとわりと最近も不意打ちでやられたような……？
って、違う！
「お義兄様……いーですか、わたしはもう十六なんですよ、もう子供じゃないんです」
「あーん？」
「……」
どうあっても押し通す気か。
助けを求めるように正面に座るお義母様を見ても、全スルー。もくもくとスープをすすっている。お義母様ー！　義娘がとっても困ってますよー！　息子さんがなんか怖いですよー！
どんなに心の中で訴えても通じるわけなく、きらきらしいお義兄様は笑顔でフォークをぶっ刺したお肉を寄越してくる。う、や、やめ？？、
ばくり。
（？？？？しまった！　ついお肉の色香に負けて……ッ）
フォークに喰らいついてしまってからだらだらと冷や汗を流すわたしに向かって、お義兄様は恍惚と笑み崩れる。
「良い子だねぇ、グレーテル」
む、か、つ、き、ます！

震えるような美声で言ってからお義兄様はそっとフォークを引き抜いた。ま、負けた……と屈辱に青ざめていると白い親指が伸びてくる。う、ん、んんん？

きゅ、と唇の端を拭われた。きょとんとしていると、お義兄様はそのままぺろりと親指を舐める。？？何だか妙にねちっこく、うっとりと。

「お、にい、さま？」

「汁、ついてたよ」

「……そう、ですか」

「うん。？？まだまだ子供だね？」

「……」

ああ、お義母様、どうか今すぐこの男を呪ってやってください。いま、すぐッ！

親愛なる友人によるとばっちり的被害について少々。

「グレーテル？？？？！」

家にいても学校にいてもどうしてこうどいつもこいつも問題起こすんでしょーか。

抱きついてきた友人の肩をぽんぽんと叩きながら、わたしは目の前の真白いのに巨大過ぎるせいで影が出来ているしろものをぼうっと見上げた。

「フリーダ……どうしてこんなことになっちゃったんですか……」

ぶわわっと広がった翼は金色の粒子を振りまき、そやつは赤ら顔で機嫌良さげにふんふんと歌っている。大音量で。良い加減耳がびりびりしてきた。

ふわふわした、淡い栗色の髪を可愛く二つに結ったフリーダはもうすでに半泣きだ。わたしも泣きたい。

「わ、わかんない、あたし、林檎酒をちょっぴりエッセンスに使っただけで、」

？？だからその林檎酒がいけなかったんですよ！

叫びたいところを堪えてなんとかため息に変換する。見上げた先では、酔っぱらって巨大化して今にも学校を破壊しそうなのにとっても機嫌は良さそうな神獣様がわふぅと大きな鳴き声をあげた。

……今日、始業式なのに。

王都の外れにひっそりと立っている我が家はいかにも怪し気でボロい木造家屋だけど、町の方に降りればほとんどが石造りだ。わたしの通うアンナ＝バルバラ高等神学校もそう。貴族のお子様もわりと多く通うこの学校の強度はそれなりなのに、今にも倒壊崩壊の危機とは何とも目頭の熱くなることだ。

村外れや王都を離れると少ないけれど、神学校には大抵神獣様か聖獣様が一体いらっしゃる。建設時にお呼びして、学校への加護を乞うのが伝統だから。？？そのご加護をくださる神獣に脅かされていては皮肉にもなんないけど。

何で偉大なる慈悲深き絶対不可侵の神獣様が巨大化して酔っぱらっていらっしゃるかと言うと。

普段の神獣様はころんと子犬のような小ささで、ぴすぴす鼻を鳴らしながらお眠りでいらっしゃる。そのお世話をするのが『神獣様お世話係』の仕事だ。まんま過ぎる名称は突っ込んじゃいけない。

その略してお世話係の本日の当番が、わたしの初等神学校時代からの友人であるフリーダだった。

フリーダは基本的に良いひとなのだけど、大抵何かしら自爆する。そして周囲を巻き込むのが日課だった。ここ一番の被害者は多分わたしで間違いない。酷い。ていうかそもそも始業式まで生徒に仕事を任すってところが鬼畜過ぎる。だいたいフリーダ一人に任せるからこんなことになるんだ。せめてアルノーがいれば止めてくれたかもしれないのに。……そこだけで被害が止まったかもしれないのに。

「うわあああああん！　どうしようグレーテル、エサイアス様、うちの学校全壊させちゃうのかなぁ！」
「ちょっ、洒落にならないこと言わないでください！」

恐ろしい！

ちなみにエサイアス様というのは神獣様のお名前だ。如何にも仰々しい異国の響きを有するこの名前、学校長様がおつけになったとかどうとか。とりあえずセンス激悪のフリーダじゃなくて良かった。それからフリーダが勝手に愛称をつけようとするのを、アルノーが止めてくれて本当に良かった。恐ろしい子！

「ああもう、早く何とかしないと」
「なんとかって、どうやって？！」
「……な、なんとかはなんとかです！　ていうか、当番って二人制ですよね？　クラウスでしたっけ……どこいったんです？」
「逃げた！」
「……」

気持ちは分かる。気持ちは分かるが？？？？？？後でシメる！
ここは聖堂の裏庭で、もっと正確に言うと神獣様のまします神聖なる『奥花園（おくのはなぞの）』が、酔っぱらった神獣様のおかげでぶっ壊れて裏庭まで繋がった丁度境界線、っていうのが正しい。わたしはたまたま聖堂の清掃当番で早めに来ていたから、お世話係の当番だったフリーダの暴挙に巻き込まれたわけだけど。ついてないったらない。まあ他に人がいなかったのが不幸中の幸いだけど。……いや、逆に不幸中の不幸じゃ……？　あれ？
だんだん迷走してきた現実逃避の思考を振り払い、わたしはぐにぐにと眉間の皺を揉み解した。

「アルノーは一緒に来なかったんですか？」
「あっ、来てる、はず！」

忘れていたのかフリーダはぱっと目を見開いた。瞬時に希望か何かで頬が紅潮する。……同行者の存在を忘れてやるな。

とりあえずアルノーがくれば少しはましだ。フリーダもだけど、アルノーはより天におわす清らかなる方々の恩寵を受けやすく、大抵の神聖生物は彼を害することはない。たとえ酔っていても彼の言葉は届くはずだから。

フリーダは大きくを息を吸い、右手につけた腕輪を握りしめて、

「あああああるうううのおおおおおおおおお！」

……吹き飛びそうなほどの大声で叫んだ。

「フリーダ、？？とエサイアス様？！　おまえ何したの？！」

フリーダの大声にわたしが頭をぐらぐらさせている間に、びっくらこいた風情のアルノーが息を切らしてやってきた。一体どこにい

たらこんなにすぐに駆けつけられるのか？？いや、違う。そうか。またそこら辺を浮遊している神々の眷属にでも運んでもらったんだろうな。神術も芯術もてんで駄目なのに、これだけは学校一なんだから、アルノーの魂には頭が上がらない。神々は魂の彩（いろ）と資質、そしてその希有さと高潔さに惚れるらしい。そんな神々にも好みがあるっていうのにアルノーはほとんど全てに愛されている。本人が悪ぶっても本質は変わらないっていう証明だ。アルノー自身はちょっと恥ずかしいらしいけど。

「うわあああんアルノー！　どうしようエサイアス様元に戻る？！」
「いや、ていうか……グレーテル、これどういうわけ？」
「林檎酒をお供（ごはん）えものに混ぜてしまったようです」
「？？？？っの、馬鹿！」
「いったぁ！」

ガツン！　という容赦ないげんこつが落ちた。もちろんフリーダの頭にだ。わたしじゃない。そんな二人を見ながらわたしはそろそろ焦ってきた。どうしよう、もうすぐ定刻が近づく。今日は始業式。学校のみんなだけならともかく、父兄の皆々様がいらしてしまう。それは困る。大いに困る。学校の面目に関わるっていうのもある？？だけど何より、お義兄様にわたしが関わっていることがばれたら！
（学校が潰れる！）
もう本当にしすこんを何とかして欲しい。面倒臭い。

「あ、アルノー、お願いします。神獣様を……っ」
「あ、ああ悪い。？？ったく、フリーダ、後で説教だぞ！」
「ええええええ！」

ええええええじゃねぇ！

ぶち切れそうになったところを呑み込む。アルノーは気軽げにたたっと走り出し、巨大化した神獣様に飛び乗った。なんつう不敬を！　と目を剥くわたし達をおいて、アルノーはもふもふした神獣様の耳元で何事か囁き、次に口許へ歩を進めた。正直酔っぱらいを何とかする方法なんてわたしは知らない。アルノーはどうするつもりだろう。とか思っていると。

「え」

アルノーの茶黒い頭がかっ開いた神獣様の口の中に突っ込んだ。

「？？？？？？？？？あ、アルノーがエサイアス様に食べられたあああああ！」

ちょっと待ってくださいフリーダ！　まだ食べられてません！入っちゃっただけです！

と心中で突っ込むものの、わたしもわたしで絶叫寸前だった。ええええ、どうしよう！

青ざめてハラハラしていると、不意に神獣様がクワッと目を血走らせた。ぎゃー！　怪奇。

『げぷう』

ぽこん、と。

アルノーが放り出されたのはその時だった。

ぺっと吐き捨てられた彼はべしゃっと地面に転がった。ごろごろ転がった。哀れ。

慌ててぱたぱたと近寄ると、ぐおおおおおといたく苦し気な声で唸りつつアルノーが起き上がる。同じく駆け寄ったフリーダがあっと声を上げた。

「エサイアス様……！」

しゅるるるる、と妙に間抜けな音を立てて神獣様は小さくなっていった。こてん、といつも通りの小柄で可愛らしいお姿でいつもの数倍気持ち良さそうに寝息を立てている。

??ま、間に合った、んでしょうか？

どきどきしつつ見守る。フリーダは小さくなった神獣様をそっと抱き上げ、背中を撫でた。けぷ、と親父臭い息を吐かれ、彼女は軽く眉をしかめる。

「お、お酒臭い……こんなに盛ってなかったのにぃ」

盛って、って。盛って、って！　毒か！

くすんとしょげるフリーダの様子に、とりあえず一件落着と息をついて、わたしは一番お疲れのアルノーを覗き込んだ。げっそりしている。

「気霊と風霊に手伝ってもらって、酒精を抜いたんだ」

「え、でも、お酒臭いみたいですけど……」

「あれはエサイアス様の周りに充満してるだけ。少なくとも始業式中は大丈夫」

おお、さすが神の寵児。ちょちょいのちょいだ。

お義兄様にばれないうちに解決したので、わたしはついつい尊敬の眼差しで彼を凝視した。居心地悪そうに照れ笑いしたアルノーは、ふとその顔色を真っ青にした。え、あれ、何でですか。

「あ、へ、え、へへへへへへンゼルさん……っ？！」

え。

わたしの顔も引きつった。

こつ、と床を踏む音に振り返る。ああ聖堂の方からいらっしゃったのか、とどうでも良いことを考えた。

「？？？？？？？グレーテル？　何してるの？」

きゃー！

わたしは精神的な恐怖のあまり、うっかりアルノーの首を絞める勢いで抱きついた。

……ええ、それが、一番まずかったって分かってますとも。

お義兄様は変態です。

お義兄様超怖い。

始業式を終えてこそこそ帰路についたわたしは、ぐずぐずと玄関の前でもたついていた。ああ帰りたくない。帰ってきたけど。

あのあと、わたしはお義兄様に笑顔でアルノーからひっぺがされ、アルノーは重傷（精神的に）なのにぽいっと放り投げられた。ぎゃっと悲鳴をあげたわたしに向かってにこやかに微笑みつつ、「早く晴れ姿を見せてね」と脅しにしか聞こえない言葉で退場を促したあの顔。ああ怖い。あの顔は、絶対、遠くから一部始終を見ていた顔だ。過保護の気のあるお義兄様は今間違いなくお怒りでいらっしゃることだろう。始業式中ずっと感じるわけない視線を感じてほんと怖かった。

??逃げよう。

わたしは血迷った気分でくるりと踵を返した。が。

「お帰りグレーテル、遅かったね」

あっさり開いた扉から現れたお義兄様の手にはっしと腕を掴まれた。いやー！

ずるずるわたしを引きずりお義兄様は家に戻る。わたしはがっくり項垂れた。

お義兄様のしすこんっぷりは昔からの知り合いにはとことん知れ

渡っている。何せ町ででくわせばお義兄様はわたしを寒気のする美辞麗句で褒めたたえて口づけ、抱きしめては抱き上げる。羞恥心で死ねそうなわたしと違って友人達はみんな「勝手にやってろバカップル」みたいな生温い目を向けてくるのだからたまったもんじゃない。ちょっと！　わたし、義妹（いもうと）！　い、も、う、と！

（これだから恋人の一人も出来ないんです！）

見た目も中身もさっぱりなわたしは仕方ないとして、お義兄様はきっとたくさんの女性の目に留まっていらっしゃるはずなのに、未だに恋人を見たことがない。出来ればうっとりするくらいの美人さんを連れてきて欲しいものなのだけど？？？？

「だからね、お友達の助けになるのは良いけど、危険なことはしちゃ駄目だって言ってるでしょ」

「……はい」

「ああいう場合は先生を呼びにいきなさい。君に何かあったらと思うと本当に胸が潰れるところだよ」

「……はい」

「あと軽々しく男にまとわりつかないの。ぼんやりしてると食われるからね」

「……は、い？」

意味が分かりませんお義兄様。

怪訝になるわたしの反応が気に要らなかったのか、お義兄様はむっと秀麗な眉をひそめた。ぶに、と鼻の頭を指で押される。くっ、並以下の顔がさらに変形するではありませんか！

「分かってなーい」

「お義兄様の言葉の方が分かりません」

「……うーん、ちょっと過保護にし過ぎたかな」

ふと、お義兄様は困ったような顔になった。その通りですよ、と言いたいところをぐっと我慢する。わたしはお義兄様のこういう表情に弱い。どんなに変態でもお義兄様はわたしのお義兄様で、嫌われたら怖いと思う一番の相手だ。これでもわたしは家族を愛しているから、なるべく困らせたくないものだと思う。だけどもそうはいかないのが現状で、お義兄様はたんとわたしに甘いけれど、とてもとてもわたしの素行に厳しい。厳しいというか、妙に構いたがる。正直鬱陶しいことこの上ないのに、美人顔で困り顔をするからわたしは自分がものすごく悪いことをしたような気分になる。ずるい。ずるいったらない。

「グレーテル、そんな顔をしないで」

ふわりと身体が一瞬宙を浮いた。あんまりにも軽やかにお義兄様に抱き上げられる。同い年の間でも小柄な類に入るわたしでも、十六ともなれば随分重いはずだ。なのにお義兄様は何でもないことのようにやってしまう。子供に戻ったようで、ものすごく、ものすごく腹立たしい。むすっとするわたしにお義兄様はさっきまでの不機嫌顔が嘘のように柔らかく微笑む。ちゅ、と耳たぶを吸われた。髪の毛を払われて、首筋を撫でられる。ぞくりとした感覚が背筋をはしった。

「お笑い、グレーテル。可愛い顔が台無しだ」
「わたしはいつもこうでしょう」
「そうかな、それじゃあ僕のグレーテル。良いと言うまで目をつむっておいで」

何がそれじゃあ、だ。舌打ちしたい気分になりながらも、わたしは結局お義兄様に逆らえない。しぶしぶ目を閉じる。とろりとした闇が広がる。光が遠くにあるのにとても暗い。ふと幼い頃の記憶が

甦りそうになって、それがすさまじく不快で、わたしはぎゅっとお義兄様にしがみついた。すると宥めるように背中を撫でられる。小さい頃にもされたそれは、だけど昔よりずっと丁寧で、壊れ物に触るようなのは一緒なのに、決して手放すまいとするように執拗だ。ぞわりとするほどの甘さと執着。そのようなものを含んで服の上から肌に貼り付くように撫でられる。？？？？？？？こ、の。

ド変態がっ！

目裏に襲いくる闇も忘れてぎりりっと唇を噛み締め、思わず怒鳴りそうになったところを指で塞がれる。押し付けられたそれは心臓があるみたいな振動を含んで、それから熱い。そこから熱が伝染するようだった。せ、せくはら。これはつまりせくはらというやつではないの？！

そう思うのに今何か動くとさらに悪いことが待っていそうで、とりあえずお義兄様の機嫌が完全に回復するのを目を閉じて待つ。

「……酷いねグレーテル。君は、本当に、綺麗だから」

「……っ、」

耳元すれすれで喋んないでくださいってば！　訴えますよ？！

「めちゃくちゃに潰してあげたくなる」

？？？？？え、

えぇえ？

ひやっとした。え、お、お義兄様？　ちょっとー？　何ですか今

の病んでる発言。マジでやりそうだから怖いんですけど？！

こつ、と額を押し付けてお義兄様は息だけで微笑った。だいすきだよ、グレーテル。人形にして閉じ込めてあげたい。そんなことをさらっというお義兄様。ああなんてこと。一体あの麗しき日々のお義兄様はいずこに。どーしてなんだってこんなに変態一直線になってしまったのか。もしやお義兄様が行っていらっしゃった学校にはこういう人がたくさんいらっしゃるのか。いやあああ、信じらんない。わたしのすてきなお義兄様を返せ！

腹の中で大分失礼なことを叫んでいると、ふと甘い息が唇をくすぐった。こそばゆい。わ、と身体を強ばらせる。？？と。

「……ん、ぅ……っ」

ちゅう、と今度は唇を押しつけられた。吸い付くように、貪るように。

「っは、……ん」

角度を変えて幾度も。首が自然と後ろへ引き、けれどもその後頭部を押さえつけられる。食べられるみたいに、接吻（キス）は続く。息つく間もない。もぞりもぞりとお義兄様の唇が動き、わたしのそれを蹂躙する。おそろしいまでに惑乱的なその感覚に乗せられて口内を唾液が溢れる。だというのに妙な渇きが疼いて口の中がからからしてきた。？？う。

（ぎゃ、あ、あ！）

ひー！　やばい！　お義兄様どんだけしすこんなの？！　触れ合（スキンシップ）い過多過ぎー！

軽く涙目になったところで、ふっとお義兄様は離れた。けれどもほっとした瞬間再び奪われる。？？ちゅ、と小鳥がついばむような口づけで。
わたしはげんなりしながらお義兄様を見上げた。……にっこりしている。これ以上なく輝いている。
（どうして？！　わたしがこんなに息切れしてるのに何でこの人はまったく呼吸の乱れもないの？！）
……もしかして、実はお義兄様は女慣れしていらっしゃるのか。もしそうならさっさと恋人を作ってくれ。

「お、おおお義兄様？」
「うん？」
「か、家族の触れ合いにしてはちょっとこう濃厚過ぎると思う、んです、が、ね」
「今更？」

くすり、と妖しくお義兄様は微笑う。そりゃ、お義兄様に口付けられるのは初めてじゃない。でも年頃の娘としては、そろそろ勘弁願いないものだ。
だって、キスって、口にキスって、こんな年にもなれば普通恋人同士でやるもんでしょう？！

「もうわたし十六なんですってば！」
「何言ってるの、これぐらい挨拶でしょ？」
「学校でこんな挨拶しませんよっ？！」
「当たり前でしょ。馬鹿だねぇ」

えー？！　何でわたしが馬鹿にされるの？！
おたおたするわたしを愛おしそうに見つめて、お義兄様はそれは

それは美しく首を傾ける。様になるところがとってもむかつく。

「解放的な人の多いセリエアゴイスティーナじゃ、こんなのキスのうちにも入んないらしいけど？」

「え、えええ？　で、でででも、それはあの、あの太陽のお国では、の、はなし、で」

「兄弟愛が深いのは良いことじゃない？」

「えー……ま、まあ、そう？　です、けど。お義兄様、いつまでたっても恋人出来ませんよ？」

「いーよ別に。僕にはグレーテルがいるから」

わたしがよくないんですけど！

反駁しようと口を開いたら、素早く唇で塞がれる。音を立ててキスされ、わたしは何故だか真っ赤になった。あああああもう、恥辱！

お義兄様はぺろりとわたしの耳を舐めながら、わたしの髪の毛をいじくって、蕩けるように目尻をゆるめる。

「……ね、グレーテル。君には僕がいるんだから、狼なんかに近寄らないで。恋人なんていらないでしょ？」

……ああ、病んでるお義兄様。

これってもう矯正不可なんでしょーか。

義妹（グレーテル）はとってもとっても哀しゅうございます。

お義兄様は変態です。（後書き）

グレーテルの中では外人さんのキスハグ的なちょっと行き過ぎた挨拶として処理されております。偏ってる！

セリエアゴイスティーナ：南の華やかな似非伊太利亜ちっくなお国。

グレーテルは砂糖菓子を携えて。

わたしの通うアンナ＝バルバラ高等神学校は基本的に半日で終る。朝早くに聖堂で朝課に参加し、黙々と司祭様のお説教を聞いて、神術や芯術、語学、史学、職業的な選択科目を受ける。お貴族様もいらっしゃるから結構濃厚な授業だ。とは言っても卒業して暮らしていく為のすべが主だけども。

神術、というのは神様のお力に似た、もしくは神様のお力を借りる、人ならざる術のことで、これはまあ大抵の人はそこそこ出来る。お祈りを欠かさず覚えていて、信心深いとさらに良い。ただ芯術は目一杯身体を酷使し、己の精神を覆す勢いでがっつり世界に働きかける、時には超神術と言われる難しい術だから、苦手な人はすごく苦手。ときどき旅人はこんなわたし達の力を魔法と呼ぶけれど、そんなに可愛らしいものじゃないと思う。そもそも魔法は理論がよく分からない。お義母様の『くろまじゅつ』はさらによく分からない。ちなみにわたしは神術はそこそこド下手だけど芯術の方はわりと普通だ。あんまりないことだけど、多分、わたしの信心深さが足りないってことだろう。

「何とか言いなさいな気持ち悪いですわね！」

そんな神学校にも後ろ暗いことは山ほどある。

ばっしゃあ、と水をぶっかけられたわたしは、ロゼッタ王宮風にくるくると髪を巻いたお嬢様をぼけらっと見つめていた。ぽたぽたと水滴が髪から落ちる。わたしは「はあ」と曖昧に頷きつつ、一体何故彼女はこのような阿呆臭い所行に打って出たのか、ということについて考える。

……うーん？　やっかみを負うほど、わたし優秀じゃないんですけども。

よく分からない。それにしても困ったな。びしょ濡れ。このまま帰ったらまたお義兄様に怒られてしまう。……いや、このお嬢様が危ない。お義兄様はそういうカンだけは良いから、きっと簡単に原因を突き止めてしまうだろう。あーやだ過保護。

「えっと……何か拭くもの、いただけませんか」

さしあたって一番の重要事項を言ってみた。のに、何故かくるくる髪のお嬢様はカッと目を剥いてさらに怒り狂った。

「馬鹿にしてますの？！」

自分が言えって言ったのに……。

面倒臭いなぁ、このひと。

ぽりぽりと濡れた頭を掻いてしまってから、その冷たさにうっと詰まる。べとべと。使ってない水で良かったけど、でもこれ結構酷いんじゃないかなー。

校舎裏なんていう古典的な場所で首をひっつかまえられ何やかんやと怒鳴られまくしたてられたかと思えばこの有様。一体このお嬢様は何がしたいんだろう。ていうか、貴族？　それとも豪商の子かな。少なくとも富裕層であることは間違いない。なんか偉そうだし。

「えーとですね、あの、何故わたしは怒られているのでしょうか」

「そこからですの？！　あなたひとの話聞いてなくって？！」

「……。……えー、あー……、……すみません」

「本当に聞いてなかったんですのッ？！」

だって急に喋るから！

ぶるぶると屈辱に震え始めたお嬢様にわたしは軽くびくついた。やばい。このひとやばい。近頃巷で頻発してるキレやすいワカモンだ。どうしよう厄介なのにぶち当たっちゃったなぁ。

「なんてひと！　あなたのような下賤な女がディートリヒ様のお側に侍るなんて、許されなくってよ！」

……えー、と。

ディートリヒ？　って、あのディートリヒ、かなぁ。てことはこのひとはやっぱりお貴族様だ。でも別に侍ってない……っていうか、そんなに親しくないのに何で？　昨日ちょっと荷物運びをお手伝いさせていただいたくらいだと思うんだけど。一体何がどうこんがらがってこんなことに。

ディートリヒ・ユストゥス・ベルンハルト・ディーツェル・マテウス＝トゥルンヴァルト。長ったらしいお名前のこのお方は、わたし達の王国シュテンヘルツ聖王国王家の十二番目の王子殿下だ。うちの王様にはそれはもうたくさんのお子様がいらっしゃるから、王都のそれなりに有名なこのアンナ＝バルバラ高等神学校にするっと入れられたぐらいのことは、別におかしなことでも珍しいことでも何でもない。ただの確率の問題だ。殿下と呼ばれるのは王宮で充分だと嘆いていらしゃったから、大抵の人はディートリヒと呼んでいる。敬称付けをやめられないひともまあいるみたいだけど。

それでもディートリヒは王子だ。だからお貴族様の彼を見る目は、わたし達なんかとはちょっぴり違う。やっぱり恐れ多いという色が強くて、だけども、いやだからこそなのか何なのか、女の子はあわよくばお嫁さんに！　という子が多い。ちなみにディートリヒはとびきりの美人だ。お義兄様にはいささか見劣りするけれど（まあこれは家族の欲目かもしれない）、底の見えない紫がかった濃い青の眼に、緩やかに波打つ銀（グレイゴールド）により近い白金の髪を肩の下あたりまで伸ばして軽く結っている。羨ましいくらいの美人さんだ。わたしは美少女は大好きだけど、男が美しくてもむかつくだけだからぜひとも王女様に生まれていただきたかった。……こんなこと言ったら不敬でひっ捕らえられるかもしれないけど。

「人違いだと思うので」

「はあっ？！　？？ってちょっとお待ちなさい！　話はまだ終ってな」

「？？？？？？アッヘンバッハ？」

……わあ、なんてナイスタイミング。

よく通るどこか冷たい、氷菓のような高めの声。それでも少年のものと分かる。一部のお嬢さんの胸をときめかせるには充分な、透き通った声はあんまり耳慣れない。わたしは小さい頃からずうっと聞いてきたお義兄様の声の方がしっくりくるから好きだ。

だって何だか、ディートリヒの声は妙に高貴で侵し難いものがあ

る。

「こんなところで、一体何をしている」

びくっ、と分かりやすくアッヘンバッハ家のご令嬢は身を震わせた。がたがたともう既に涙目だ。恥じらうように目を伏せて「あ、ああ、あ」と言葉にならない声を吐く。なんつうベタな。

「ディ、ディートリヒ、様……！　これはっ」

「……言い訳は良い。己の行動を俺に見られて恥じるなら、さっさと清潔な布の一つでも持ってくるんだな」

「？？？？！」

ぼろっ……とお嬢様は涙を零した。きらきらとその溢れる涙を風になびかせて、彼女は逃げるように走り出した。うわーお、古典的。わたしは空笑いした。何だろう、このとっても損した感は。え、あれ、この構図わたし悪者じゃない？

「……大丈夫か」

「あ、すみません、変なところをお見せしてしまって」

「いや、俺のせいだろう」

「……あ、あはははは」

分かってるんならああいう信者達を何とかしてくれ！　とか思うのはさすがに酷なんだろうな。突き詰めればディートリヒのせいじゃないし。でもなんか割に合わないなぁ。

「ところでディートリヒはどうしてこんなところにいらっしゃるんですか？」

「いや、……フリーダに苺（エルトベーレ）を取ってくるよう頼まれてな。神獣様の

今のご好物らしい」

自国の王子をパシるとはフリーダ恐るべし。

まあ、それに素直に従うディートリヒも何だか何だかだけど。ふうん、と納得してわたしはしぱしぱと目をしばたたいた。うー、水が沁みる。気持ち悪い。

ディートリヒはそんなわたしの様子を見て申し訳なさそうな表情になった。

「そんなに気にしないでください。それより苺、早く持っていった方が良いでしょう？」

「ああ、？？すまん」

「律儀ですねぇ」

苦笑してわたしは自分の用事を済ませる為に彼と別れた。

てくてくと歩き、裏庭の奥へ進む。ディートリヒとは丁度反対側だ。白い花が年がら年中咲いている場所。今は蒲公英（レーヴェンツァーン）も咲いていたり綿毛になっていたりする。わたしはその中の綿毛をひとつ、いただきますと呟いて手折った。ふう、と息を吐きかける。一瞬で半分以上の種が飛び上がり風に乗って流れていく。わたしはそれが全て目に見えなくなる前に、親指と人差し指をくわえて、ピイイイイイ、と口笛を吹いた。

すぐさま、ばさばさばさっと羽ばたきの音が届く。見上げると首まわりが灰色の、全体的に真っ白い鳥が大きく翼を広げて旋回していた。

「シュテルン！」

プガァ、と情緒もへったくれもない声でシュテルンは鳴いた。

星に砂糖をひとすくい。

つい、と手の甲を空に晒すと、勢い良く滑空したシュテルンが大きなかぎ爪ごとそりゃもう容赦なく止まりにやってきた。ぐ、あああああ重い痛い！

「シュテルン……っ、もうちょっとどうにかならんのですか！」

「プゲェ」

う、うぜぇ。

ちぃいっと舌打ちしてから、わたしは膨れっ面でシュテルンを撫でてやった。もっさりした喉の下の毛がふわふわだ。しばらくわしゃわしゃしてやると渋い顔をしつつ頭をこすりつけてくる。プガァ、とやっぱり可愛くない鳴き声。そしてぽたりぽたりと落ちる水滴に遠慮なく嫌そうになった。し、失礼な。

「お父様からの言伝はどこです？」

「プギョエー」

ケヘッとシュテルンが何かを吐き捨てた。ふよふよとまぁるい形の光が浮かび、甘い匂いを醸し出す。……クッキーの匂いだ。お父様、相変わらずお菓子がお好きなんですね……。はは、と相変わらずらしいお父様のご趣味に苦笑いした時、ぱちんと光が弾けた。

『おはよう麗しのグレーテル。僕のツェツィーリアは今日も素敵に錯乱中かい？　ヘンゼルはきっと君を溺愛しているんだろうね。まったく微笑ましい限りだよ』

くあああああ、どうでも良いですそんなこと！
本題はなんですか本題は！

『うんうんきっと今君は「さっさと本題話せこのくそ親父！」と思春期の子供らしく毒づいていることだろう。ああ父は哀しい。哀しいよグレーテル！』

うぜえええ。

『いつか、君が父さんに涙とともに抱擁してくれる日を心待ちにしているよ！　さて、本題だ』

思わず踵を返しそうになった絶妙な具合でお父様の『言伝』は本題に入った。む、むかつく。

『本当は研究院に入ったヘンゼルに頼もうかとも思ったんだけどね。確かアンナ＝バルバラ高等神学校の方が店に近かった気がするから、君に頼むよ。いいかい、よーく聞いてくれ。まずはね、？？？？？』

漸く告げられたおつかいの内容をしっかり頭に留め置いて、わたしはふんふんと一人頷いた。

お父様は狩りが趣味の自称木こりだけど、基本的に芯術や神々の研究をなさっていらっしゃる。それのどこが木こりなんだって感じだけど、お義母様と再婚なさる前、わたしが本当に幼い頃は、確かにずっと森の中にいた。その頃から神出鬼没だったけど、よくよく考えれば王都には滅多に出ていかれなかった。そういえばお父様が

町でお仕事するようになったのは一体いつ頃からだったろうか。

ともかく、お父様はゲルトラウト王立研究院が近くにある王宮の最奥の研究所で日々わたしにはよく分からない研究に明け暮れている。時々遊びにいらっしゃるご同僚の方々もちょっと変わった方が多くて、未だに「一体毎日ナニなさってるんですか」と聞くことが出来ずにいる。なんか怖いし。

そういうわけで、半引きこもり状態のお父様はよくよくわたしにおつかいを頼まれる。そういう場合、一旦夢の中で呼び出され、綿毛のある場所で伝達役のシュテルンがわたしに言伝をくれることになっている。シュテルンはよく分からない。物心つく頃からずっといたのだけど、もしかしたら王宮から貸していただいた聖獣様なのかもしれない。だとすると、お父様は幼いわたしの世話の為にあんまり王宮のお仕事に行かれてなかったのだろうか、とこの頃そんなことを考える。もしそうならば何だかとても申し訳ない。

「プゲェ？」

「あ、すみません。ありがとうございました、シュテルン」

スカートの隠しから砂糖菓子の入った袋を取り出し、その一粒をシュテルンに差し出した。シュテルンはこの時ばかりはいっとう機嫌良さそうにくつくつとついばむ。プギョー、と嬉しげに鳴いてばさっと翼を広げる。そのまま一気に空まで飛び上がり、はばたいていった。

「……現金ですねぇ」

さすがお父様の伝言鳥。

神聖史学の授業はフリーダとクラウスが一緒だった。アルノーはあんなに神々に好かれているのに神聖史学は苦手らしい。ていうか、自分の知る、神々に教えられたマニアックな知識と神聖史学で語られることが微妙に一致しなかったりするからこんがらがるとか。それは史学学者や教師に言ったら無言でキレられそうだ。

「グレーテル！　どうしようわたし今日当たるかも！」
「大丈夫ですよ、間違ってもアヒレス先生は怒らないと思いますし」
「そういう問題か……」

ぼそ、と背後で呟かれた声に吃驚する。

「ディートリヒ？　同じ授業でしたっけ」
「……まあな」

何だか朝から妙に縁がある。こんなに近くに座ることなんてきっとなかったから、今まで一緒の授業だということも知らなかった。ふう、ともの憂げにため息をついて、彼はぱらぱら教本をめくる。どこか面倒そうな気怠さが伝わってきて、わたしはいまいちこの王子様の内心を掴み取れなかった。……まあ、そんな必要ないんだけ

ど。

ディートリヒという人は、時々喋ることはあるけれど、去年違う組だったからあんまり関わりがない。フリーダはわりと仲が良いらしい、というのが不思議なくらいだ。一見ディートリヒはとても真面目そうだし、厄介ごとはこりごりだ、という風情がある。根っからの厄介ごとそのものであるフリーダとは気が合わない……というより相性が悪そうなのに。不思議なもんだ。

「あれー？　ディートリヒ、こんな傍で受けるの珍しくない？　どしたの？」
「気分だ。気にするな」
「そ？　りょーかーい」

……意外に合ってる。

本当に仲良いんですねぇ、とつい口をついて出そうになった言葉を慌てて呑み込み、わたしも同じく教本を開いた。版画で印刷された本はところどころくすんでいて、絵の方はほとんど黒い。載せる意味あるのかこれは。

???仲が良い？

ふと、わたしは怖いことに気付いた。へらりと笑う友人を勢いよく振り返る。フリーダはきょとんと目を丸くした。なぁに、グレーテル。なぁんか死にそうな顔、とか何とか心外過ぎる発言ぶっこいて彼女は首を傾げた。わたしはだけど次にぱっとディートリヒを見た。こちらにも不可解そうな顔をされる。???ああ、ええ、あああ？！

「ディートリヒッ??」
「はいはいはいはーい、お前さんたちみんな死人の如く口を閉じてはお静かに。授業始めるぞー」
さりげなく酷いことを言いながらのアヒレス先生の言葉に、わたしは仕方なく口を閉じた。

……タイミング悪い。

フリーダは文句なく、ディートリヒと仲が良い。ちょっと喋ったくらいのわたしがあんなことされるくらいなんだから、フリーダはとっくに目をつけられているんじゃないか。
そう思うわたしは多分、変じゃない。

「???というわけで????バールケの詩曰く????」

ていうかていうかていうか。
何でディートリヒとまったく接点のないわたしを彼女は攻撃したんだろう。はっきり言って、ディートリヒと喋ったり、荷物運びを手伝ったり、なんて些細なこと、誰だってやってる。一体どういう基準でわたしに目をつけたのか。……見た目とかだったら、屈辱的過ぎる。そもそもこんなに近づいたのは今日が初めてだ。
（そういえば、ディートリヒって、わたしのこと知ってるんでしょうか）

名前を呼ばれた覚えはないから、多分知らないのだろう。それならそれで全然構わないんだけど、そうするとやっぱり不思議だ。うーん？

「グレーテルー、どうしようやっぱり無理ー」
「え、？？ああ、もうちょっとですか？」
「うん、多分ね、ここ。も、ぜんっぜん思い出せない」
「……フリーダはやれば出来る子です」
「グレーテルも分かんないんだね？！　分かんないんだねっ？！」

くっ、失敬な。わたしの記憶力は鳥並みなんです仕方ないじゃないですか！

「そこー、何こそこそしてるー。神獣様のおやつになるかー？」
「ななななりません！」

ぶるぶるとかぶりを振るフリーダの肩を、後ろからすいと伸びた指が軽く叩いた。えっ、と驚くわたし達に向かって、ディートリヒが先生の話している頁とは違う場所を開いて、その中の一カ所をとんとん、と指で指し示す。不思議そうにしていたフリーダはすぐさまぱあっと顔を輝かせた。こっそりと口を寄せ、「ありがとー！」と心底助かった声で言う。ディートリヒは無言で頷き、さっさと教本を手に戻した。
わたしはぱちくりと瞬いて彼を凝視する。

「……なんだ？」

居心地悪そうな声に、

「……い、いえ。ちょっと、いえ心底、びっくらこいただけです」

わたしはうっかり本音を零した。

アンナ＝バルバラの王子様。

ものっそく怪訝そうに唇をひん曲げたディートリヒの顔は美形が残念なくらいに崩れている。ああ本当、どうして世の中女の子より綺麗な男が多いのか。どうして美少女に生まれてこなかったのか！

残念でならないったら。

ともあれ、喋っていてはまた注意されてしまう。何度かうつらうつらするフリーダをいつも通りに平手で起こして、わたしは真面目に授業を受けた。……ええ、真面目に！

神聖史学が終ったあと、わたしはさっさと教室を出て行こうとするディートリヒの首根っこをすかさず引っ掴んだ。ぐおえ、と王子様らしからぬ声で呻かれてハッと手を放す。あ、危ない危ない。うっかり不敬罪で訴えられるとこだった。

「ディートリヒ！　……あ、えっとすみません。大丈夫です、か？」

怒鳴るように呼んだところ、相手がげほげほと喉もとを押さえているのを見てわたしはちょっとご機嫌伺いした。じろ、と睨まれる。……すみません。

お義母様にする時もそうだけど、わたしは手加減というものが苦

手らしい。うっかり絞殺しないよう充分気をつけないと。

「……で、なんだ？」

「あ、？？えとですね。あの、今朝のことなんですが」

「なぁに？　グレーテルってば、なんかあったの？」

……フリーダがいるところではなんだか話しにくいですねぇ。

わたしの微妙な表情を読んだのか、何らかのことを察したのか、ディートリヒが「ちょっと厄介ごとだ。フリーダが関わると余計こんがらがるから解決したら言う」と慣れた調子であしらい、いとも自然にわたしの手首を握って教室から抜け出した。ひどいー、という残念そうな声が背中にかかる。

うう……すみません、フリーダ。

ちょっと気まずく思ってわたしは心の中で謝った。

歩きながらディートリヒは再びわたしに話の続きを促した。

「ディートリヒは、フリーダと以前から仲が良いですよね？　それじゃあフリーダにあなたの狂信者による被害はあったりしないのですか？」

ディートリヒはくっと瞠目した。え、何ですかその反応。あれ、と思ってから、わたしは自分の言葉を脳内で繰り返し？？？？

（……あああ？！）

しまったオブラートに包まなさ過ぎた！

ひくくっと頬を引きつらせる。気が急くせいか、うっかり思ったまんまを言ってしまった。さすがに失礼だろう。ひゃあああ、と内心悲鳴をあげていると、そんなわたしの懸念に反して彼は今までの落ち着いた仮面をひっくり返したような闊達さで大笑いした。

「狂信者！　それはいいな！　確かにあの類は狂信者だ。俺にでなく、王家に対するもんだがな」

「そ、そうですね……あの、お声が、」

「はじめに危うい発言をしたのはおまえの方だろう？　グレーテル」

今度はわたしが目を見開いた。？？知ってらっしゃったんですか。意外。意外だ。いや予想外。わたしがディートリヒの名前を知っているのはともかく、彼がわたしのを知っているのはどうにも居心地が悪い。まるでお友達みたいじゃないですか。

「……フリーダによく聞いていたからな」

「え、あれ、わたし、口に出してましたか？」

「ダダ漏れだったぞ」

少々の意地悪さを浮かべて彼は微笑んだ。美人。悪女の貌（かお）だ。他の王室（尊き）の方々のお顔は存知あげないけれど、もし？？？？恐れ多い考えだから、あんまり口にするのもよろしくないのだけど、もし、彼が首（おびと）になられたとしたら、その凄絶なお美しさで国の半数の人心を掌握出来ることだろう。この方のお顔はそのような引力がある。少なくとも今のご治世に耽溺しているものはそのお子でいらっしゃるこの方に一も二もなく跪きたくなるのだろうとわたしは瞬間的に

思った。
どんなにこの平民商家貴族と多種多様に入り乱れる神学校に馴染んでいらっしゃっても、やっぱりディートリヒは額ずき敬し奉るべき王族なのだ。

「？？？？フリーダが辱めを受けることは、おそらくあり得ない」

その美貌をちらとも崩さず呟き、ディートリヒは翡翠の石が埋め込まれた支柱を右に曲がった。わたしの次の授業は古詩学だったから方向としてはとても助かる。だけども彼は一体何の授業なのか。この周辺でやっているものと言えば、天文、神語、それから？？？？

……あれ？

さらりと流してしまった、けども、何だか今とっても聞き捨てならないことを言われた気がする。それから言い回しがとてもショッキングだったその意味はつまり今朝方わたしがやられたようなことを指すのだろうか。そう思うと妙に情けない気分になる。それから少しだけ、そうほんとーに少しだけ、イラッとした。……ああ、

どうも、わたしはそれなりに憤慨しているらしかった。

そりゃあ、そうだ。言いがかりで水なんてぶっかけられて、先生に神術で『乾かして』もらったのは良かったけど、それで水気はなくなったからそりゃそれは良かったけど、むかつくことには変わりない。わたしはもう少しでまたお義兄様にお説教されるところだったのに、あのお嬢様はそんなこと、きっと思いもしないんだ。
（……いえ、私怨は、ともかく。今はフリーダです）
何しろ彼女はわたしの数少ない友人でさらに言えば籤を一本引いたところたった一人で千もの厄介ごとを引き起こす恐ろしい娘なの

だから、なるたけ障り??じゃない、危害、いや、被害は少ない方が良い。

「どうしてですか?」

「……フリーダは王宮付き高等神祇官の娘だから、な」

わたしは目を丸くし、そうしてあっさり納得した。ぽこんと胸の裡からもやもやが綺麗さっぱり消え失せる。ああ、??そうか、確かに。そう、でした。よくよく考えればすぐ分かることだったのに、どうも頭に血がのぼっていたらしい。すっかり失念していた。ふっと現実に引き戻されたような感覚がして、今度は逆に、今まで妙な憂慮を起こしていた自分がひどく恥ずかしくなった。

司祭様と似たようでいて違う職業である神祇官というご職業は、時にお貴族様よりも権力がある、らしい。わたしはそんな雲の上のような人々の思惑やらお考えやらお立場やらはとんと見当がつかないから、よく知らないけど。

基本的にお祈りや布教、慈善活動をなさるのが司祭様方で、この方々は政(まつりごと)にお関わりになることは少ない。というよりそういう生臭いところとは区別された、でもまた微妙に生臭くないとは言えない位置にいらっしゃる。

だけども神祇官??俗に神官様と呼ばれる方々は王宮内や、領地での簡易的な祭祀、やっぱりわたしにはよく分からないあれこれを司る。占をしたり気象を見たりもなさるらしい。そして、高等神術を極め、それを職業として扱えるまでに至った方が着任される。それには詩師、もしくは神師の資格もいるという。司祭様方はお祈りやものごとを教えることが主なお仕事だから、たぶん、大分違うんだろう。??ああ、そうだ、お義兄様が昔仰っていたことには、緊急時、どちらがより命の危険にさらされるかとすると完璧に神祇官

の方だということ。より物質的な問題で。
非難の矢面に立つのは司祭様。というより王宮内にある大神殿の最奥にいらっしゃる聖下や巫女様なのだと思う。滅多に表に出ていらっしゃらない、これまた雲の上の方々だ。まあ今のところそれほどの問題はないから、普段は記憶の彼方にあることがらだ。
聖下と巫女様は、ほとんど権力を持たない彼らの中で唯一王室と対等でいらっしゃるようで、噂によると時々ご一緒にお食事なさったりしているらしい。もっとも、わたし達の王国で一番尊いお方は王陛下でいらっしゃるのだけども。

そういえばディートリヒは巫女様にお会いしたことがあるのだろうか。いっとう良いものを食べていることだし、きっと美少女に違いない。……まあ、底辺の食べ物しか摂っていなくても美しいひとはたくさんいるけど。

「それではフリーダは絶対、大丈夫なんですね」

確認の為、もう一度念を押すようにわたしは問いかけた。ああ、と緩やかに頷かれ、多少ほっとする。いくら神官様のご息女だと言えど、度を過ぎて暴走した女ほど怖いものはないのだから。まあ、踏み外して堕ち崩れた男も同様に言える。

……それにしても。

「……それくらいの分別はつくのに、どうしてわたしを攻撃しようと思ったんでしょうねぇ。あんまりにも短慮だと思いませんか、ディートリヒ？」
「……いや、？？つまり、それは多分、」

何やら歯切れが悪い。

なんです？　と先を促すと彼はとんでもなく気まずげにごほんと咳払いをした。んんん？

「つまり、おまえの身分はいちゃもんつけても大して何もならない、と彼女が考えているということだろう」

……あー。

一瞬沈黙してしまったわたしは、なんとなくうら寂しい気分になった。つまり「あんたなんかお呼びじゃないのヨ！　この底辺を蠢いている汚らしいメスブタが！」ということか。疑いは少なくとも気に障ったらガツッとやっちゃうんですね。

「ディートリヒ」

「……すまん」

「格差社界って超怖いですね」

「……すまん」

高貴なるトュルンバルト王家の直系であり現在十二番目の王子であらせられるディートリヒ殿下はそれはそれは弱り切ったお顔で仰った。

小休止　ヘンゼル曰く、

彼の脳内ではたびたび義妹に対する深刻な愛情が暴走しては炸裂する。

いや、たびたびというのはおかしいかもしれない。ヘンゼルにとって一日の九割は義妹のことで頭の隅から隅まで閉められていて、残りの一割もほとんど侵食？？いや食いつぶされている状態なのだから。

加熱用（コッヘル）調理器具が盛大な悲鳴をほとばしらせ、さっさと茶の準備を始めよと喚いている。けれども今朝方より秒速で減少していく義妹（グレーテル）成分に苛々していたヘンゼルはそんなもの知るものかとばかりに無視し、同期の友人が呆れた風情で野苺と東の地に生息する葉の一種を混ぜたなかなかメルヘンな紅茶を出してくれるまで、自分の課題に没頭していた。古詩の文献を漁り、葉の紙に、溶かした白墨をつけた木片を使って文字を書き殴る。彼の内心に反して流麗な線を描く文字が浮き上がり、そこら中に散らばっていく。ぐるるるる、という唸り声に漸く約一時間ぶりにその顔をあげたヘンゼルは、空腹を訴えてくる子犬の姿の聖獣の額を力一杯弾いた。

『キャウン！』

「犬みたいな声出しても可愛くもないよ、アハティ。おまえがグレーテルだったら僕だって機嫌良く薔薇と宝石のご飯でも差し出してやったのに」

ちっ、使えない犬風情が。

罰当たりなことを考えつつ、彼はいつの間にか隣に用意されてい

た紅茶を当然のように口許へ運び、優雅に亜麻色の液体を嚥下した。ごくん、と白い喉が動き、天使めいた金の髪が揺れる。グレーテルが幼い頃たいそう気に入っていたもののひとつだ。今ではさして興味を抱いてくれないのがひどく淋しい。グレーテル。僕の可愛いグレーテル。甘いお菓子と小鳥のささめき、白い霧と光にとける花が好きだった幼い義妹(いもうと)。

ああ困ったな。彼は古詩の綴りを確認しながらぼんやりと思った。否。

心底うんざり犬の一匹でも焼き殺したい気分で思った。

グレーテルが、足りない。

「ヘンゼル！　愛しい愛しいグレーテルちゃんが恋しくて苛ついてるのはよっく分かったから神術で課題に八つ当たりすんのやめろ！」

「黙れ人の義妹をちゃん呼びするな死ね」

「どわあああっっ？！」

ピン、と空中で人差し指を弾く。きらりと銀色が光って一直線に友人の頭蓋に突っ込んだ。がふっ、というわりと重傷っぽい悲鳴をものともせず、ヘンゼルはゆっくりと椅子から立ち上がる。軽く死にそうな友人は床を毛虫の如くのたうちまわりながら涙目で彼を見上げた。

「何すんだよ！」

「あのね、金輪際あの子の名を軽々しく呼ぶな？？？？って何回言わせれば分かるんだよ。呼ぶな、見るな、思い出すな。穢れる」

「ひでぇよ！」

「ホルスト。グレーテルは、僕だけの可愛い可愛いグレーテルなんだよ」

うっそりとそれはまあ堕落した天使のように恍惚とヘンゼルは美しい顔を歪めた。ふわりと目と口だけで微笑する。グレーテル、とその名を口にする時ばかり、彼はこの世の栄華を極めた王者のように、婉然と。

ぞわ、とホルストは総毛立った。やべぇ、ちょーキレてる。

どんだけ堪え性ないんだよ、と口にしない理性があった自分を褒めてやりたい。

研究院、というのはその名の通り、この王国に存在する数多の研究対象をそれそのものに取り憑かれたように研究する場所である。とは言え正式な職場ではない。様々な資格を正規に取得する為の場所だ。能力の向上を第一の目的とし、在籍するのは未だ学生に区分されるものたちである。が、彼らを教え導く気難しい偏屈な教師達が跋扈しているのも事実だ。彼らは大抵そこらのごくごく普通の教師達と違って我が道を行く微妙にトチ狂った人間ばかりなので、研究院に入った生徒達は皆一様にパシられることになるのがならわしだった。

今大量の書物と神術要素や神々の眷属の気配を充満させたこの部屋で行われている残業まがいのこともそのひとつである。

つまり、以前よりヘンゼルはずっとグレーテルと離れている時間が長くなったということなのだ。

「おまえさ、何で研究院入ったの？　その気になりゃ特赦で神師の

資格ぐらい、取れたんじゃね？」
「義父上が入っといた方が良いと仰ってね。何よりグレーテルが、」
「あ、うん、分かった。はいはいはい」

げんなりとホルストは片手を振り、ヘンゼルは興味もなさげに視線を落とす。ふと背筋の冷えるような水気が周囲を覆ったかと思えば、一瞬にして視界が流水で囲われる。怪訝に眉をひそめればどうもそれは水を司る神々の眷属による悪戯のようだった。左右縦横一面に張られた水鏡。不思議な色を宿す義妹とは似ても似つかぬ己の姿をヘンゼルはぼんやりと眺めた。

……昔は、あんなにこの容姿を気に入っていたのに。

揺れる水鏡の中で長い金の睫毛が影を作る。青い瞳。あの子とは違う。ああ。

ああ、あの子が欲しい。あの目も髪も唇も耳も手も指も足も爪も目尻に滲み零れ落ちる涙もその身の裡に流れる血液すら、全て。

あの子の何もかもを僕のものにしてしまえたなら良いのに。

貴公子もかくやというその美貌を最大限にきらめかせて、彼はうっとりと現実逃避した。うっ、とホルストがドン引きするのも構わずに、見た目的には麗しいことこの上ない微笑でニヤニヤする。数日前に久しぶりに触れた彼女の唇は焦げつくように甘かった。ふるりと震えるあの熱と甘い悲鳴。ああ耐えられない。今すぐ奪ってやりたくなる。

「……お、おーい？　ヘンゼル？　ヘンゼルー？　……おまえさ、あんまり構いすぎると逃げられるぞ」
「はあ？　何言ってんの。僕はどんなにグレーテルが違うウジ虫にたぶらかされても逃がしてなんかやらないよ」
「ウジ……、大切なんだろ？　いーのかよ、そんなことして」

こいつの頭の中で自分は一体義妹に何をしているというのか。軽く失礼である。

「？？？？良いんだよ、グレーテル自身が昔言ったんだから」

「はー？」

ふ、と魔性の笑みでヘンゼルは水の眷属の悪戯を握りつぶす。ばしゃん、と凄まじい音が立って水鏡は消え、うすら寒そうにするホルストと目があった。

「たまには我を通したって良いんだよ、ってね」

ホルストは真剣に、このド変態の友人の義妹が哀れ極まりなく思ったのだった。

グレーテル、グレーテル。

僕の愛しいグレーテル。僕の馬鹿なグレーテル。
君があんまり綺麗だから、こんな風につけ込まれる。

ああ、ねぇ、僕のグレーテル。

愛しい君が僕の鳥籠の中でさえずっていてくれるなら、いくらでも尽くしてあげるけど。
君が逃げようって言うんなら。

あらゆる手札を駆使して君を閉じ込めてあげるから。

午後、小鳥のさえずりと。

じゃああのお嬢様の気が逸れるまで我慢するしかないんですかね、とげんなりしつつ、わたしは古詩学の教室の扉に手をかけた。ディートリヒを振り返り、別れを告げようとしたところ、彼は構わず同じ教室に入ろうと腕を伸ばしてくる。ごん、とわたしのひたいと彼の肘がぶち当たった。痛った……っ！　軽く涙目。

「うわ、すまん！　大丈夫か」

「い、いえ、こちらこそいきなり振り返ってすみません。……ディートリヒって、古詩学、同じでしたっけ？」

「……今更か？　おまえ、もうちょっと授業中目を使え。というか当てられてるだろうが」

で、ですよね……あれー？　何で覚えてないんだろう。わたし、確かに記憶力悪いけどそこまで薄情じゃない筈なんだけどなぁ。一つだけならともかく二つもなんて。そもそもディートリヒだよ、ディートリヒ。王子様。すごーく目立つし、何より美人さんだし、そんな簡単に失念することもないよねぇ。何でだー？

「……まあ、いい。さっさと入るぞ」

「あ、はい」

何だか疲れたようにディートリヒは扉を開けた。半歩入って、扉を開けていてくれる。おお、紳士。さすが。ありがたく通らせていただいて、わたしは適当な席を探した。？？？？？と。

「？？？？？？？？？！」

ぞくっ、と背筋を冷たいものが流れた。殺気。の、ような？
そっと視線を上げると、そこかしこから注視されているのが分かった。驚いたような顔と、つい見てしまった、という顔が多い。けど、何だか射殺したそうな顔もちらほらしている。全員、女の子、だ。それも上等そうな顔。制服はともかく、髪飾りや装飾品がいやに凝っている。だから多分、お貴族様の娘さんだろう。豪商の子もいなくもないだろうけど、多分、この視線の原因って。
（ディートリヒ、ですよねぇ）
考えなくても分かる。なんたって彼女達にとってディートリヒは『ただのびっくりするくらい綺麗な異性』じゃあないんだから。

「グレーテル？　何してる、早く席を決めてくれ」

いやいやいやいや今あなたの存在で何やら大変な敵意をいただいてしまっているんですけどね？！

見られ慣れ過ぎている為か、ディートリヒはそんな娘さん達の熱視線をさらりと無視してわたしの肩を引っ張った。ややややーめーてーくーだーさーいー！　これ以上やっかみ買いたくないんですよう！　って訴えても分かんないですよね！　そらそうですよねでも分かっていただきたかった！
いつまで経ってもだらだら冷や汗を流すだけのわたしに業を煮やしたのか、ディートリヒはわたしの腕を引いて教室の隅まで移動してしまった。ああ、あああ、視線が。視線が綺麗についてくる！
ついてきてますよディートリヒ？！　何でそんなスルー出来るの？！
それから古詩の先生がいらっしゃるまでわたしは何とも居心地の悪い中、諸悪の根源と和やかに会話をし続けなければいけなかった。

？？？？いや、ディートリヒは善い人なんですけどね！

アンナ＝バルバラ高等神学校は半日学校だから、わたし達は昼時には家に帰ることが出来る。お弁当を持ってきても良いし、家で食べても良い。わたしは大抵家で食べる。放っておくとお義母様がお昼ご飯を抜いて『くろまじゅつ』に専念なさってしまうからだ。

「ただいま戻りましたー」

返事がないことを承知で囁くように言い、足早に炊事場へ向かう。ぱたん、とドアを軽く押す、と。

中側に予想外の力で引っ張られた。

「わっ？」

「お帰りグレーテル。遅いから学校を潰しに行こうかとはらはらしちゃったよ」

ハラハラはこっちだ。なんだ潰しに行こうかって！　恐ろしい！

……じゃ、ない。

え。

何で、昼間っから、お義兄様、が。

しかも何でこのひとはいきなり人を抱きしめやがるんですか暑苦しい！

ぷるぷると拳を震わせている間に抱擁はきつくなっていく。ぎゅううううう、とまさにわたしが押しつぶされそうだ。髪の毛を掬うようにされて、耳たぶに唇を寄せられる。何度も頭を撫でぐりされてもう既に色々なものが口から抜け出ていた。だけどもするりと背筋をなぞるようにお義兄様のてのひらが滑り、腰の下辺りから締め寄せられてはさすがに理性が戻ってくる。

「ちょっ？？？？やめ、放しやがれですよこの変態！」

なんか言葉遣いおかしくなったけど気にしない！

突っ張るようにして押しのける。お義兄様は愉快そうにくすくす微笑って顔を赤くするわたしのひたいにちゅっと音を立てて口付けた。ぬああっ！　せくはら！

髪ごと頭を撫でていた手が緩やかに下がり、首を通ってわたしの頬にぴたりとてのひらをくっつけ、柔く頭を持ち上げられる。滲むような蒼い瞳。相変わらずどこか病んだ色を含んだその眼は極上の笑みを浮かべ、とろけるようにわたしを捕らえる。愛おしいとその二つの蒼が強烈にわたしに訴える。うっかりくらりとしてしまうのは仕方ない。過保護なこの義兄の愛情は、なんというか、重過ぎるくらい重い。

「グレーテル、かわい」

ぞぞぞっ、と総毛立った。そんな艶っぽい顔で言われても！　怖ぇよ！　って、う、わ。わわ。

猫の子みたいに鼻を擦り寄せられて、目尻をぺろりと舐められた。その舌先が少しずつ頬を通り、口の端まできて、終いにはふわっとお義兄様の唇がわたしの唇の上で跳ねる。ひ、い。このぐらいは日常なのだけども、その痕を追うように上唇と下唇を丹念に舐め上げられれば恥ずかしさで死にそうになってもおかしくなんかない、はずだ。妙に心臓がばくばくする。ああ、もう、お義兄様って本当に心臓に悪い！　綺麗だから尚更何も出来なくなるんだ。

「ん……、お、にい、さま、わたし、？？っふ」

ちう、と上唇の真ん中を吸われる。吸われた端から熱くなる。疼くような痺れが走った。かぷ、と今度は噛まれて、わたしはびくりと肩を跳ねさせた。唇中あますことなく幾度も吸われて息が出来ない。僅かな隙間で必死に呼吸するからどんどん息が上がる。

「っは……ぁ、」

不意に突き放すように離れた唇に促されて、は、と口を半開いてしまう。自然と舌が下がり、？？お義兄様に絡めとられる。それが合図みたいにお義兄様にしては乱暴なほど抱きしめる力を強くして、深く口付けてきた。ぜんぶを貪られる、みたい、な。情けないことに足の力が抜けてきてがくっと膝が折れそうになる。だけども妙なところで抜かりないお義兄様は腰を掴む腕を滑らせてひょいとわたしを横抱きにした。かあああっと頬が赤くなる。ちょ、今？？お尻さわ、触った！　せくはらだっつうの！

口内で繋がった舌が漸く抜き取られ、わたしは息も絶え絶えに半目になった。と、溢れた唾液を舐めとられる。？？？？う、あ、あ。（は、ずかしい……！）

何、今日のお義兄様！　いつも以上にベタベタしてくるんですけ

ど！　ひーっ、やめてキスしな、

「んう……っ」

どうしようこれなんかわたし食べられてるみたいですよ？　接吻（キス）じゃないですよこれっ？

ていうかわたしお義母様にお食事作んなきゃいけないのに。ていうかわたしもお腹空いてるのに。あ、何、もしかして、お義兄様もご飯食べてらっしゃらないんだろーか。

「お義兄さ、……ふ」

「ん……、なに？」

最後に強く口吸われたところで、漸く解放された。わたしはお義兄様の腕の中で、軽く身震いしながらしがみつく。

「あ、の、もしかしてお腹空いてらっしゃいますか？」

「？？うん、まあ、そう言われれば、そうかな」

あ、やっぱり。

何か悪戯っぽい目が気にならなくもないけど、つまり、わたしをご飯代わりにしやがられたということらしい。やめてください。義妹食べないでください。

とは言っても、空腹は確かに堪え難いものだって、わたしは知ってる。だからこれはあんまり責められない。少なくともわたしは。

「わたしもお昼まだなんです。今作りますから、少しま、」

ぐう、とわたしのお腹が不満げに鳴いたのは丁度その時だった。

珍しくお義兄様はマトモそうな表情できょとんとする。それからくすりと柔らかく微笑んだ。くっ、なんか、微笑ましい顔されてる！

あああもう恥ずかしいなあ！

「いーよ、僕の可愛い小鳥持ちのグレーテル。今日は僕がお昼ご飯を作ろうね」

「っ！」

「あいたっ、もう酷いなグレーテル。そんな可愛らしく踏まれるとねぇ……どきどきしてくる」

「変態いいいい！」

羞恥のあまりがつっと踵を振り回してお義兄様の腰を蹴りつけるとド変態的な言葉が返ってきて、わたしはぞわぞわーっと背中を駆け抜けた悪寒ごと叫んだ。

午後、小鳥のさえずりと。（後書き）

小鳥持ち＝お腹の音。です。指摘されると結構恥ずかしい、ですよね！

ただいま戻りましたわ、お義母様。

ぐるるるる、と再びお腹が鳴った。耳まで真っ赤になる。い、いつもは、こんなことないのに。今日はお義兄様が引き止めるから……！

憮然とするわたしにお義兄様はまるでお義兄様然として笑い、

「ほうら、いいから着替えておいで。義母上への挨拶も忘れずに」

「ひあ……っ？！」

ちゅっとわたしの人差し指に口づけたかと思ったら、そのまま口に含み、一瞬のうちに舌先で舐め回してから吸い付いた。ぱっと引き抜いてぷるぷる震えると、お義兄様は天使様みたいな顔をつやつやさせている。こ、この、へんたい……っ！

「お、お義兄様の、」

「いいこだから着替えてきなさい。早くしないと僕が君を食べてしまうよ」

いやー！

わたしはぐるんっと身を翻して脇目も振らず階段を駆け上った。目、目が、目が本気だった！

凄まじい奇声が相も変わらず廊下に響いている。わたしは乱れた息を整えて、お義母様のお部屋に入った。ふと妙に納得のいかない

気分になる。いつもお義母様はこうして錯乱していらっしゃるから、わたしは帰ってきてもお帰りと言ってくれる人はいない。だけども今日、珍しく早く帰ってきたお義兄様は見通したように出迎えた。多分、お義兄様は、わたしがそれをものすごく喜ぶことを知っている。だから大袈裟なハグをかましてどさくさ紛れに変態行為にまで及ばれても、わたしはお帰りと、言葉だけじゃなくて全身で言われたことが、嬉しくてたまらなくて、何だか結局お義兄様に感謝してしまう。そこまで見越しているなら本当にお義兄様というお方は腹立たしいひとだった。

???お義母様に、ご挨拶。

ただいま、という言葉。届くかどうかもしれないのに、お義兄様は簡単にそんなことを仰る。

「お、お義母様」

「きえええええええええええええ！」

「お義母様！　グレーテル、ただいま戻りました！」

両手をグワッと振り上げ妙な踊りを始められたお義母様の腰をはっしと掴む。そのまま虫のようにへばりついて大声を出すと、ぴたっとお義母様の動きが止まった。ぎぎぎぎぎ、と首が鈍く動く。ひー、怖いですお義母様。

「……ぐれーてる」

「は、、はい、お義母様。お義兄様が先に帰っていらっしゃって、また珍しくもお食事を作ってくださるそうです。お義母様も、ご一緒に、」

そこまで言いかけたわたしの言葉を遮ったのは、振り返って、引き離すようにわたしの肩を押したお義母様の手。その仕草にびくりとする。謝って、慌てながら離れようとする、と。

「……お帰りなさい、グレーテル」

わたしは目を見開いた。細く、弱々しい声。とけて消えてしまいそうな。けれどもそれははっきりと、わたしに向けられた言葉。

じわじわとお腹のあたりがあったかくなってくる。何だか無性に泣きそうで、わたしはただ、はい、と微笑った。

「はい、お義母様。ただいま、です」

チーズをふんだんに使い、刻んだパセリが螺旋状に並んでいるシュペッツェレがテーブルの中央にどんと乗っている。香ばしい麺の匂いがふわりと鼻孔をくすぐった。パンはカイザーブレートヒェン。お義兄様は料理がお上手だ。あんまりやらないけれど、作るとすごく上手い。出来ればお義兄様が料理をしてくださったら楽なのに、気が向かないと一切手を出さないのだから面倒な人だ。

はふ、と息を吹きかけながらフォークで麺をすくい、あぐあぐと口に運ぶ。美味しい。作り立てだからちょっと熱いけれど、お腹に溜まるこっしりとした味がとても美味しい。

「あとでオレンジクーヘンを作るからね」

……どうしたんですかお義兄様。今日、やけに機嫌がよろしくないですか。だいたいお義兄様はあんまり甘いものはお好きでないはずなのに。

ぽかんと見上げてしまうとお義兄様は食事を中断してまでにっこりと微笑み返してくる。不意に長い指が伸びて正面からわたしの頭をわしゃわしゃ撫でた。わたしがシュテルンにするように。何だかよく分からないけども、されるがままになっていると、一房髪を持っていかれて、くん、と匂いを嗅がれた。???う、ん、んんん？

「んな、」

「いーにおい」

ふ、と唇に寄せるのが見えた。な、ななななな。わたしが固まってしまうとしばらく髪は弄ばれて、ぼた、とわたしのフォークから焼いたチーズと麺の欠片が皿に落ちた。

「……ヘンゼル、グレーテルに、食べさせておあげなさい」

わたしは違う意味で仰天した。お、お義母様が、助けてくださった?！　めめめ珍し過ぎる……！　え、これ、何かの前触れじゃないですよね？

「……可愛がるのは……食後に思う存分……なさい……」

??がくっ、と肩がずり落ちた。ええええええ、ちょちょちょちょっとお義母様あああああ?！　何ですかそのオチ。

「分かりましたよ、義母上。食事に戻ります」

いや分からないでください！

お義兄様はそれはきらめかしい笑顔で頷き、するりとわたしの髪を離した。弧を描いてそれは肩まで戻ってくる。お義兄様とは全然違う色。ああ羨ましい。お義兄様はどうしてあんなに綺麗な髪と綺

麗な眼、完璧な美貌で産まれていらっしゃったんだろう。美男美女のご夫婦だったのだろうか。むむむ、お父様は結構美形なのにな。わたしには全然、これっぽっちも受け継がれていない。

そんなことを考えながらパンを頬張っていたものだから、お義母様がじっと見つめてきていたことを、わたしは気付かなかった。

その目がいつものように虚ろではなく、まるで母親のような眼差しだったことも。

「さあ僕の胸においで、グレーテル！」

「誰がいきますかあああ！」

がつっ、と膝蹴りして憤然と「ご馳走様でした！」と叫んで食卓を抜ける。背後でお義兄様が何だかうすら寒くて気持ち悪いことを言ってきたけど無視。だんだん遠ざかり、判然としなくなっていくお義兄様の声がお義母様に向かう。けれども内容までは把握出来ない。何しろわたしはただでさえむかむかと憤慨していたのだから。

「……義母上、あなたはもう、好きなようにやって良いのです。ツェツィーリアとして。この家の誰にだって、??あの子にだって」

「……」

そういうわけで、そんな会話もわたしの耳には届かない。

尋問には甘いケーキを。

わたしの部屋にオレンジクーヘンを持ってお義兄様がいらっしゃったのは宿題を終えて少し経ってからのことだった。

ぼんやりと今日の出来事を反芻し、後でお父様のおつかいにいかなきゃ、とそんなことを考えていた矢先。……お父様、わたしがアンナ＝バルバラに通っていても買いに行くのは一旦家に帰ってからだって、すっかり忘れていらっしゃる。ともかく午餐の鐘が鳴るまでにいかなくちゃ。

そんなことをだらだら考えていたら軽いノックの音がした。警戒しつつドアを開ける。すると芳醇なオレンジの匂いがふわりと漂い込んできた。むむ、仕方ありませんね。まったく卑怯な。

お義兄様を招き入れ、寝台脇の卓を引っ張り出す。大皿に乗ったクーヘンにごくりと唾を呑んだ。おおおう、美味しそう。どきどきしながらすっかりくつろぎ気分のお義兄様からケーキナイフを奪い取ってそっと刃を入れる。小皿に取り分け、薔薇の装飾のフォークをお義兄様に、白百合の装飾のフォークを自分に。それからぽすん、と寝台に腰掛ける。隣にお義兄様。

「い、いただいても？」

「もちろん」

お義兄様はにこにこした。わたしも破顔する。？？いざ、クーヘン！

がっつくように頬張ってむぐむぐと噛み締める。ええ、家族の前だからこそ出来る暴挙ですとも。ディートリヒの前でやろうものなら、彼自身はともかく周りのお貴族様達にすごい形相で睨まれることだろう。まったく上流階級は礼儀にうるさい。大事なことだけど

も。

「……？　お義兄様は召し上がらないのですか」

「ん？　うん、あとでね」

あとで？

何だかよく分からないけど、今食べる気はないらしい。変なの、怪訝な思いで顔を上げてお義兄様を直視したわたしは、ぎくりと硬直した。

お義兄様が笑ってらっしゃる。

にこにこと、まるで穏やかに、まるで正常に、絶え間なく笑ってらっしゃる。

……ものすごく、嫌な予感がした。

動揺してつい己の姿を確認してしまう。匂い、は、特にしない。髪の毛も汚れてない。どこも、おかしくは、ない、はず。

なのに、お義兄様はとても怖いお顔で笑ってらっしゃる。

最後の欠片をごくんとわたしが呑み込んだ時、お義兄様はそのぞっとするほど綺麗な指を伸ばしてわたしの顎を掴んだ。

「あ、あの、おにい、さま？」

「グレーテル、何があったの？」

間髪入れずにお義兄様は言った。え、と喉が引きつる。？？ああ、おかしい、わたし、今、別に変なところなんてなかったはずなのに。

密かに青ざめると麗しい笑顔はさらに深くなる。ねえ、グレーテル。あまいあまい、あまったるいくらいの声音がわたしの名前を何度も呼ぶ。たわんで響くみたいに浸透する。ねぇ、僕の、愛しいグ

レーテル。お義兄様は繰り返す。震えるような美声が耳元を掠めてざらりと巻きつく。

「一体何をされたの？」

いつの間にか両手で頭の両側から挟まれていた。髪の毛がぐしゃぐしゃになっているのが分かる。でもお義兄様は気にしない。にこにこと美しく笑ったまま、ヘンゼルお義兄様はわたしを射抜く。

グレーテル、と。もう一度、繰り返して。

「言わないと僕が君を食べてしまうよ」

めちゃくちゃに壊して泣かせてくるわせて、絶望するくらいあいしてあげる。

天使みたいな顔でそんなことをのたまうお義兄様の表情はびっくりするぐらい本気だった。ぞーっ、と危険信号が脳裏でチカチカし始める。い、いえうあ。怖い。お義兄様怖い！　だらだらと冷や汗が流れ、より身近な恐怖に心臓がばくばくと駆け巡る。どどどどどうしよう。お義兄様、お、怒っていらっしゃる。？？何で？！　何でわたし何も言ってないのにお義兄様は分かってらっしゃるの？！

おかしくないですか？！

内心、ひい、とわたしが悲鳴をあげてることだって、きっとお義兄様はお見通しだ。分かってて、このひとはこういうことをするんだ。

でも、だけど、いつもは簡単に降参するわたしは、何故かこのときばかり、何だかよく分からない焦燥感で、ものすごく、それはもうものすっっっごく、言いたくなかった。

だから、抵抗を試みる。

「い、」
「い？」
「いわ、なきゃ、だめですか」

お義兄様は優しく首を傾けた。まったく女の敵と言っても過言ではないさらさらした金糸がわたしの額にかかる。わたしは唇をひん曲げて踏ん張った。お腹の中にはお義兄様が作った美味しいオレンジクーヘン。胸の内には常にないほどの妙な意地。ええ、まだ、睨み合えますとも！

「グレーテル？」

ああ、でも。

うぐ、とわたしは詰まった。詰まった隙にちゅっと瞼に音を立てられる。ひえええ。やっぱい今日のお義兄様はとっても絶好調のようだから、このままだと本気で食べられる。駄目だろ！　お義兄様が人食いなんて嫌過ぎる！　それも初犯は義妹だなんて！　にんげんはにんげんをたべてもおいしくないとおもいます！

拳をぐっと握り締めながら丁度心中で叫んだ時、甘い吐息がかかった。頬骨のあたりが震える。ぞわわわわっ、と全身が反応する。じわじわと視界があやふやになってきて、その合間を突くように唇の端をぺろりと舐められた。

「ひ……ゃ、あ……っ、んふ」

あむ、と最初に食べられたのは上唇。柔らかくお義兄様の唇で噛

まれる……というより揉まれる。端から、少しずつ、じりじりと。

……うひい。

水音がぐわんぐわんと頭を揺らした。熱い。は、と必死で息を吐き出す。頭部から離れたかと思ったお義兄様の手がそうっとわたしの手首を持ち上げた。ゆるやかな拘束だ、と気付く理性は残っている。けども、腕も頭も足も心臓も唇も、何もかもが痺れていて駄目だった。逃げ、られ、ない。

ふと、唇が離れる。ひんやりとした微風がわたしとお義兄様との僅かな間をすり抜ける。お義兄様がわたしを見る。??ああ、どうしてこんなに宝石みたいに綺麗な目がこんなに病んでいるのか。熱っぽく潤んだ双眸は色気たっぷりで義妹(わたし)でもうっかり悩殺されそうなのだけど、いかんせん残念さが全面に出るのは一体何故。

湿った唇がまた押し当てられる。ん、う。今度はちう、と吸われていく。長いくちづけ、で、わたしの唇の皮がお義兄様に吸収される。くるしい、ん、ですがお義兄様！

「っは、あ……ん、ふあ？」

あーもうどうしよう駄目負ける。

既に朦朧とし始めていたわたしは案の定すっかり降参していた。だけども喘ぎ声しか出なくてその意思が表せない。一旦離れた唇が下唇を揉み始める。ぱくり、ぱくりと優しく食べられていく。最後にぺろぺろとねちっこく舐められた。

「……僕はね、グレーテル。君のすべてを知らなくても、君がされた不快なことを看過出来るほど、控えめじゃないんだよ」

??ずき、ときた。

お義兄様が悪い。

お義兄様は、そんな、妙に切なく言うから。しかも世界で一番綺麗な声で。

なんだか変に罪悪感が沸き起こってきて、ごめんなさいをしたくなるのは、ぜんぶ、ぜんぶお義兄様が悪い。

「……です」

「うん？」

「みず、かけられた、だけ、です」

言ってしまってから後悔した。お義兄様の蒼の眸に剣呑な色が走り抜ける。そう、と小さな呟き。

「でも、それだけじゃないでしょ」

とん、と肩を押されてあれっと思った時には寝台に仰向けに倒れていた。座った姿勢で倒れたものだから膝の裏が微妙に痛い。起き上がろうとしたところに何故かお義兄様が乗っかってくる。首筋に金色の頭がうずめられて、むやみやたらとくすぐったかった。

高貴な猫みたいだ。

わたしはくすぐったさについくすくす笑ってしまって身をよじらせる。ふっと息を吐きかけられてさらに身をよじる。う、く、くすぐったい、です！　と訴えたつもりなのだけど不明瞭なものになってしまった。せくはらはやめたのかとちょっぴりほっとしていたら、不意に雷が走ったみたいな衝撃が首筋を襲って、びくんっと身体が跳ね上がった。??ん、なな。

「あッ、……ぅ、や、」

ちょ、やめ、首！　首噛みやがりましたよこのひとっ？！

真っ赤になったわたしに向かってお義兄様は妖艶に微笑う。ぜんぶお吐き、グレーテル。見透かすみたいな目で言われて、わたしはひっと頬を引きつらせた。

「い、言いま、っんむ」

言い終わらないうちに覆い被さられ、気付けば深くくちづけられている。い、息、でき、ない。でも手首を押さえられているから身動きも取れない。あと怒ってらっしゃるお義兄様が超怖い。

歯列を割ってぬるりとしたものが侵入してきて、口内を舐め回される。ぎゃーっ、とあわあわするわたしの舌をお義兄様のそれがあっさり絡めとった。

「っ、ふ……ぅ、あ……んっ……！」

しばらくぴちゃりぴちゃりと水音が響き、わたしは熱いくちづけの餌食になっていた。わたしが本当に気を失いそうになるたびにすっと唇が離れ、だけどもすぐさままた塞がれる。その繰り返し。……なんだか色々貪り取られた気がする。

それでも、その合間合間になんとか喋ったわたしに対するお義兄様の漸うの返答は、

「？？？？うん、だいたい分かったよ。じゃあ取りあえずその子殺そっか」

実に病んでるとしか言い様のないド犯罪発言だった。

尋問には甘いケーキを。（後書き）

タイトルはあの……カツ丼みたいな感じで。

クッキーと駒鳥とグレーテル。

いっぺんお豆で頭かち割って一分一秒でも正常に穏便に晴れがましい言葉をお吐きになったらどうですかこの犯罪未遂が！　と叫んで頭突きしてお義兄様が変態らしく痛みにうっとり頬を染めている姿にぞぞぞっとしながらわたしは一気に部屋を飛び出した。あああああもうあの変態は！　なんでそこで頬染めるんです？！　気色悪いわ！

籐籠を持って勢い良く家を飛び出し、がすがすと地を蹴って暫く経ってから、オレンジクーヘンもっと食べておけばよかった、とわたしはかっくり肩を落とした。

？？？？お義兄様ってば、本当に、スペックだけは上物なのに。

もう何度目か知れない「なんでこうなった」はぬるい風にとけて消えた。

王都の端っこにあるヴァイスクォルツ街のこれまた端にある、銀と金糸雀通りはいつも人で溢れ返っている。

晴れがましいほどの青空に白い毛の鳥が飛び交っていた。のどか

な鳴き声がわんわんと耳に響き、それが漸く途切れたかと思うと賑やかな通りの喧噪が押し寄せてくる。アルマおばさんの店からは焼きたてのパンの匂いが惜しげなく店先に零れ出ていて、丁度一服していたらしい店員の青年がにっこり笑って挨拶しながら「今焼けたとこだよ、ひときれどうだい？」とか何とかさりげなく客寄せした。わたしは笑顔で挨拶だけ返して、塗装された石畳の道をほてほてと歩く。好い天気。幼い子供達が綺麗なお母さんの手を引っ張って砂糖漬けの果物をねだっている。もうっ、今日だけですからね！　と怒った顔を作りながらそのお母さんがきっちり人数分のそれを買ってあげているのが見えた。その光景がちょっと眩しくて、わたしは目を細める。

通りを右に曲がって、奥まったところにある広場の中央、王祖の銅像と噴水の前で流しの一座が陽気な音楽を奏でている。あれはどこの国の曲だったろう。泣いた子も驚いて笑う、明るいけど不思議な異国の曲調。細い道からそうっと覗くと、灰色の帽子と西の方の、明るい色調の衣装が窺えた。うーん、カルマアスールとか、かなー。帽子に挿さってる虹色の羽根がなんとも変わってるけど。色鮮やかなフリルがわっさわさしてる。

わたしはノインと小さく刻まれた壁のすぐ横にあるヘルガ姐さんの店へ入った。からん、ころん、と取り付けられた小さな鐘が鳴る。

店内の壁にくっついた棚には怪し気な小物がところ狭しと並び、床には暗色の濃いめの絨毯やら掛け布の類がごろごろしている。相も変わらず怪しいったらない。おまけに隅では一際大きい象の置物が冷たい目でずうんと佇立していた。中央には勘定台が有り、その内側で薄布を頭から被った店主がだらんと安楽椅子に腰掛けて、というか足を投げ出している。

「おやいらっしゃい、グレーテル。お父さんのおつかいかい？」

気怠そうな声と一緒に、紫っぽい煙がぼふっと顔にかかった。けけむたい。

「ヘルガ姐さん……なんですかこれ、……うえ。なんか、すっごい変な匂い、っていうか、腐りかけの果物みたいな……？」

「しっつれいだね。こりゃ西方の練香だ。向こうの観葉植物の匂いとよく似てるらしいけどね。それで？　用件はなんだい。どうせくだらん材量だろ」

ふっ、とヘルガ姐さんはまた煙を吐いた。手にもった煙管から溢れるそれは、紛うことなく紫だ。え、えええ。いいんですかそんな色でこんな匂い。なんか危ないっぽいんですけど！

色々突っ込みたいことはあったけども、おつかいを済ませることの方が大事だ。わたしはお父様の言いつけを思い出しながら、ひとつひとつ、指を折っていく。

「え、と……『緋の花姫』の朝露、トロールの爪、今日一番綺麗なお水、無患字、白蝶草、落羽松の葉、藪蘭のすり潰した液。それから、」

ぐ、とわたしは途中で詰まった。ヘルガ姐さんは面倒そうに、なんだい、と聞いてくる。う、本当に、ここで頼むんですかお父様！

非常に嫌々ながら、わたしはぼそっと続けた。

「……ヘルガ姐さんの、クッキーを」

「……はあ？」

なんだいそれは、と言いた気な視線が痛い！　ああどうして今日は朝から色んな人間の胡散臭気な視線に耐えなければいけないんでしょーか！　意味が分からない！

「お、お父様がですね、その、他が駄目でも絶対これだけは貰ってくるように、って！　あの、」
「……ああ、……あー、ふうん。相変わらず食えない男だねぇ、あんたの父さんは。……ちっ、憎たらしい」

今ちって言いましたよねー？！
あわあわするわたしに「ちょっと待ってな」と言い置き、ヘルガ姐さんは店の奥に入っていった。漸くけむたさが薄らいできて、わたしはぱたぱたと残り香を手で払った。西の香り、かあ。……異文化って恐ろしい。
ぼけっと何度来ても物珍しい店内を見物しているうちにヘルガ姐さんが戻ってきた。手にたくさんの品物を抱えている。

「はいよ、待たせたね。安心おし、全部揃ってるよ」
「え、……クッキーも、ですか？」

突然そんなことを願ったら、焼き上がるまで待たなければいけないと思っていたのに。お父様ってば予知の能力でも身につけましたか。心の中で父を胡乱に思うと、ヘルガ姐さんは心底忌々しそうに舌打ちする。うわーお本日二度目。いつもやる気なさそうな姐さんにしては珍しい。

「ああ。あたしのクッキーはね、普通のとちょっと違うんだよ。大抵いつも置いてある。だけどあたしがそんなものを作れることを知ってる奴なんて滅多にいない。あんたの父さんも知ってたなんてね……あのスカした顔、いっぺんぶん殴ってやりたいよ」
「え、あ、は、すみません」

発言が物騒ですヘルガ姐さん！　ちょっとまってやめてわたしを

射殺したそうに睨まないでください！

こんなにヘルガ姐さんが嫌がることを、どうしてお父様が知っていらっしゃるのか。というかどうしてわたしに頼むんです。ああわたしも殴りたい。毎回毎回よく分からないおつかい頼んでからに！

籐籠の中にひとつひとつ、受け取ったおつかいの品を収納しながらわたしは心底思った。？？？？ああ、いっぺん殴（ボコ）りたい！

「お代はあんたの父さんに求めればいいんだね？」

「あ、そうしていただけると助かります」

「ん、りょーかい。お買い上げありがとね、また来なよ」

にやりと続けられた勧誘にはいと笑って、わたしはヘルガ姐さんの店『駒鳥と雷雨』をあとにした。

てくてくと銀と金糸雀通りを過ぎ、整備された花壇と樹林の爽やかな匂いにほっとしつつ、灰の目通りに入る。がやがやとこちらも騒がしい通りの中で、何やら真剣に話し合っている男の人たちが角に集まっていた。真剣、と言ってもどこか楽しそうで、妙に浮き足立って見える。その様子に、わたしはぱちりと瞬いた。ああ、そういえばもうすぐ生誕祭か。もうすぐって言ってもまだまだだけども。多分、男の人達は、その準備やら計画やらで話し合っているんだろう。生誕祭は我らが王陛下のお誕生日で、国を上げての大祭になる。

呑んで騒いで祝って喜び、陛下の治世に祝杯を上げる。地方でさえそうなのだから、王都はさらにそれが顕著で、演し物や路上での食べ物の販売はもとより、それに仮装行列なんてものまで起きる。あの流しの一座もそのひとつなのかもしれない。ってことは、これからどんどん、王都にはお客さんが増えてくるってことだ。暑苦しくなるなぁ。

そんなことを考えつつ、マルゴおばさんから林檎を買い、お代を支払ったところで聞き慣れた声に呼びかけられた。振り向くと、相手がぱっと相好を崩す。

「やっぱり！　グレーテル、何してんの？　おつかい？」
「クラウス。それにアルノーも。二人こそどうしたんですか。灰の目通りにいるなんて、珍しいじゃないですか」
「ちょっと買い物に……？？？？いや、ちょっと待て。おまえ本当に一人か？」

急に焦った様子で辺りを見回し始めたクラウスに「はあ？」とわたしは思いっきり眉を跳ね上げた。何を言っているのかこのひとは。どっからどう見ても一人でしょうが。

「おつかいですから。一人に決まってるでしょう」
「い、いや、でもさ……ヘンゼルさんは？」

青ざめた顔でアルノーが聞いてくる。ヘンゼルお義兄様？　……ああ、またあのひとですか。合点がいって、わたしはふかーくため息を吐いた。どーしてこう、お義兄様は居ても居なくてもわたしに平穏を与えてくださらないのか。まったく。

「いませんよ、一人です。お義兄様は今おうちで休んでいらっしゃる筈ですから。アルノーこそ、フリーダと一緒じゃないなんて珍し

いですね」
「や、グレーテルほどじゃないよ……」
「……」
なんなんですか、その聞き捨てならない台詞は。失礼な。

天使は閃光とともに。

むすっとするわたしをおいて二人は心底ほっとした顔で胸を撫で下ろした。それからクラウスがわたしの籐籠を見てきょとんとした。む、なんですか？

「もしかして今からお父さんとこ行くん？」
「あ、はい。そうですけど……？」
「んじゃ途中まで一緒に行こうぜ。俺らも王宮に用があるんだよ」

王宮？

さらりとクラウスの口から出た言葉にわたしは少々面食らった。アルノーはともかく、クラウスは頭の天辺から爪先まで、どこからどうみてもつんつるてんの庶民だ。わたしと同じく、王宮なんて雲の上だろう。……まあ、わたしはお父様のおつかいで、時々お邪魔しているのだけど。それだって毎度毎度心臓が飛び出そうなくらいどきどきする。別に悪いことしてないのにとっ捕まりそうで堪らなくなる。

そんなところに、何でクラウスが、用事？

怪訝に見やればアルノーが苦笑する。いやあ、とクラウスの後を継ぐ言葉尻が濁った。

「今さ、フリーダがいるんだ。王宮に。それでちょっと、気晴らしにね」
「フリーダが？　どうして」
「ん、もうすぐ生誕祭だから。その関係で、ちょっとね」

よく分からない。けど、たぶん、私が了知してはいけない何かな

んだろう。そういう場合、何も聞かない方が良い。きっと相手を困らせるだけでなく、迷惑もかけてしまうから。あと面倒臭いし。厄介ごとはお義兄様とお義母様の奇行で充分だ。

分かりました、と頷き、わたしは籐籠にぽこんと林檎を詰めた。

てくてくと大通り（ハウプトシュトラーセ）を抜け、貴族街に入る。三時の鐘が鳴った。王都は早朝の五時、お昼過ぎの三時、夕時の七時に神殿に隣接した時計台が鐘を鳴らす。神術も芯術も使わず手動で行われているから、まあまあ誤差がある。だけども時間を確認するには丁度良い。

「おー、もうこんな時間か。なんか食う？　あそこで揚げ菓子売ってるけど」

自分こそお腹空いたみたいな顔でクラウスが言った。そうだねぇ、とアルノーが返す。わたしは呆れつつ頷いた。三人で蜜のかかった揚げ菓子をひとつずつ買い、もそもそ食べながら道を歩く。ちょっと目がちかちかするくらい優雅で豪奢なお屋敷が並ぶ貴族街は、道往く人もきらきらしていた。輝く金髪をくるんと巻いた貴婦人がつんつんしながら早歩きで紳士を振り払っている。……紳士？　しつこい男は嫌われますよ、と声を大にして言いたい。

アルノーが何だか気後れした顔でちらちらと周りを見る。さんざっぱらお父君について通ってるだろうに、彼は未だに慣れないらしい。純朴そうなアルノーはとても、とても！　心安らぐ。まったくうちのお義兄様はどうしてああなっちゃったんでしょうねぇ。グレーテル、とちょっと冷たくて、ぎこちなくて、対応に困っている声

が、今でも耳に甦る。幼い頃の、お義兄様のお声。ああ麗しきかな昔の思い出。

？？？？そんなことをつらりつらりと考えていたとき、不意に目の前で閃光が爆ぜた。

「……は？」

壁が破裂したんですけど。

音もなく陥没した煉瓦壁をそろそろそろと横目で見やり、わたしは絶句した。まだ目はちかちかしている。光っていうのはモロにくらうと視覚をバカにするとは知ってたけども、こんなに酷い眩しさはない。太陽だって恥じらうだろう。わたしはそんなことをぼうっと考えながら揚げ菓子の最後のひとかけらをばくりと口に放り込んだ。

「……グレーテルさあ、よくそんな余裕だな」

「いえ現実逃避です」

しぱしぱするらしく、クラウスは何度も瞬きを繰り返していた。多分景色がぼんやりするんだろうな、と同情しつつ、ふと軽い瓦礫を被って何やら生物らしき？？？？というより人間らしき手足が見え、た、気……が？

「……えっ」

「？？？？？？姫様？！」

えっ、姫様？！

その台詞にぎょっとするわたしの横を、ばびゅんと光の速さでアルノーが駆け抜けていく。そうして白いひと（たぶん光のせいでそう見えるのだと思う）の傍に跪き、ぐいぐいと引き上げてやる。アルノーがフリーダに対してでなく血相を変えるのは本当に珍しい。わたしはぽかんとして、同じくぽかんとするクラウスと目を見合わせてから、慌ててアルノー達に駆け寄った。何だかよく分からないけど人命救助は大切だ。

白いひとが起き上がる。白いひとはどうやら瓦礫だけでなく白い布も被っているようだった。司祭様が身に纏うような長い裳裾のご衣装に、伸びる白い袖は外側に開いている。首のあたりまでを覆ったやっぱり司祭様のような服と、胸元に下がる十字架。あまり見られないけれど、うちの国には女性の司祭様もいらっしゃる。随分前は修道女様しかおられなかったのだけども、幾年か前に女性の王陛下が女性に対する差別的なものごとにたくさん異議を唱えたとかで、今のシュテンヘルツは女性にはとても暮らしやすいと言える。とは言え万事が万事そうというわけでもないのが痛いところだけど。仕方ない。女性蔑視というのはつまるところ女を己より弱いと勝手に勘違いした上に正当に評価されるべき賢さに嫉妬してままならぬ感情を支配欲に変えた男の愚かしさの象徴のようなものだ、とヨハンナ先生が仰っていた。ヨハンナ先生は女性を差別する男がこの世で一番嫌いなのだそうだ。曰く、『ある頭さえ使わないバカ』だから。

「……いたたたた……うー、擦りむいちゃった」

わたしはぱっと目をまん丸くした。霧が晴れるように視界が鮮明になってくる。うわあ。すごい、綺麗な、声！　夢見るような、でも甘過ぎない、きらきら光を振りまくみたいな天音。

白いひとが顔をあげる。アルノーが手伝い、彼女はふわっと立っ

た。まさに、ふわっと。
目が合った。
「……う、」
（うわあああああああああああっ！　超ッ、美少女、です！）
わたしは感激した。ちょっぴり泣きそうになった。もう、完璧なまでの、美少女！　こぼれおちる光の輪を描く銀色の髪はくるくると先が緩やかに波打っていて、聖母様が微笑むような黄金の瞳は長い睫毛に縁取られて、さらには光の加減できらりと虹色に変化する。服の上からでも細いと分かる肢体。ちらりと覗く足もてのひらも真っ白だった。
彼女はわたし達と、それからアルノーを見上げて、ぱちぱちと目をしばたたいた。
「あ、あれ？　アルノー？　どうしているの？」
「姫様こそ、どうしてこんなところにいらっしゃるんですか……？！　それに今日はフリーダがお会いしに行ったはずでしょう」
「あ、うん、でもね、ちょっとあって……ねぇね、あの子達はアルノーのおともだち？　可愛いね！」
美少女に可愛いって言われた！　たぶん森の仲間達的な意味合いだと思うけど！
わたしは知らず知らずのうち、クラウスの裾をぐいぐい引っ張っていた。のだけども、反応がない。んんん？　見上げると、クラウスは彼女のあまりの美しさにやられたらしく、声も出ない様子だった。
「やべ……お迎えきてね？」
「わたし、クラウスと共死になんて嫌ですよ。ちょっとシッカリし

てください。おかげで目ぇ覚めちゃったじゃないですか」
「……グレーテルのドライクール……」
「クラウスは言葉のセンス最悪です」

言い合うわたし達を尻目に、アルノーはあからさまにしまった、という体(てい)で顔を覆った。天まで仰いでいる。でも白いひとはにこにこするだけだ。

「だーいじょうぶ、アルノーのおともだちだもん。怖いことなんてしないでしょ？」
「そりゃ、そうですけど、でも」
「だいたいアルノーがみだりに姫様なんて呼ぶからだよ。いつも『ユティ』で良いって言ってるじゃない？」
「恐れ多いんですよ……」

わたしとクラウスはぴたりと動きを止めた。再び顔を見合わせる。姫様。ユティ。司祭様らしきご衣装。アルノーが顔見知りで、しかも敬語を使う相手？
……あれ？　なんかいやーな予感してきましたよ？

アルノーはため息をつくと、数少ない周囲の目からも隠すように、わたし達を煉瓦向こうの小さな路地裏まで連れていった。壁と壁に挟まれた空間を、白いひとは新鮮そうに眺めている。

「……姫様。自分で自己紹介お願いします。俺、あとでイーナ様に殺されたくないです」
「もー、心配性だなぁ。わたしが大丈夫って言ってるんだから、そうじゃないことなんてありえないよ。そうでしょ？」

にっ、と悪戯っぽく笑って彼女はアルノーを見上げる。深いふか

ーいため息が返ってきたのを確認してから、そのひとはわたし達に向き直った。にっこりと、それはもう天使様と言って差し支えないお顔で微笑まれる。

「こんにちは、はじめまして。わたしはユスティーナ・エレン・ラウラ・エリーザベト・クリューゲル。シュテンヘルツの巫女ってことになってるけど、ユティって呼んでくれると嬉しいな！」

平穏の象徴と光降らすひと。

わたしはひっくり返りそうになった。

？？？？よりによって、巫女様！　輝ける、大神殿の最奥に秘しあらせられる、ユスティーナ猊下！

ありえない。なんでそんな、下手すればディートリヒなんかよりよっぽど大物危険物な方が街角で瓦礫なんて被ってるんですか。かきん、と固まったままのわたしたちを、巫女様はにこにこと見つめる。

……み、見つめる。

あれ……なんか、視線、が、痛いんですけど。

「あ、あの……？」

「うん？」

にっこにこだ。機嫌良さそうに首を傾げて、光で出来ているのではあるまいかと見紛う銀の髪が、彼女の肩でくしゃりと絡まる。けれども余程上等な髪質なのかすぐに解けてしまう。なんと羨ましい。

そこまでつらつらと考えてしまってから、わたしはハッと我に返った。そうでした、名乗ってませんでした。

「あ、えっと、グレーテルと申します。み……ユスティーナ様」

たとえ人通りのないところだと言っても、むやみやたらと口にするのは躊躇われる。だから思い切って御名をお呼びさせていただいたところ、ユスティーナ様は露骨に嫌そうな顔をした。えっ、とわ

たしは青ざめる。どうしよう不敬だったでしょうか。

「ユティでいーってば、グレーテルちゃん」

「ちゃん？！」

なにそのなんか可愛い感じ！　イヤー！　ぞぞぞぞっっと鳥肌が立ったので、わたしは慌てて言い直した。

「あああの、グレーテル、で、結構です、ユティ様！」

「わたしもユティでいーんだけどなー。でも無理な気持ちは分かるからそれでいいよ。それで、隣の君のお名前は、聞いちゃいけないのかな？」

ちょっと遠慮気味にユス……ユティ様は仰った。突然話しかけられたクラウスは目を剥き、ぼっと真っ赤になってからあわわわわわあわと何やら愉快な感じに狼狽えた。ごすっ、と肘鉄を入れてやるとちょっぴり大人しくなる。

「クラウス・バーデです、ゆす、ユティ猊下！　どどどどうぞよろしくお願いしますッ！」

どもり過ぎです。

呆れて冷たい視線を送ってしまったけども、ユティ様は暢気に「よろしくー」などと笑うだけだ。なんだか明るい方だなぁ。お貴族様すら問答無用で平伏す方なのに肩も凝らないし、息苦しくもない。まあディートリヒも相当気安いけど、ユティ様はそれ以上だ。にこやかで人懐っこい感じで、周囲はふわふわと春の陽気が漂うみたいな。お花が咲いてるっていうのか……ん、いや、これは確か揶揄の類だった気がする。危ない危ない。

ともかく、想像よりずっと近寄り安くて、それから優しそうなひとだった。

「それで姫様、なんだってこんなところにいらっしゃるんです？」

ずっと我慢していたらしいアルノーがはらはらした風に言った。なんだろう、アルノーって女難なんだろうか。……あ、しまったすごいしっくりくる。何しろあのフリーダの幼馴染みなのだから、それも星回りなのかもしれない。わたしはこっそり同情した。クラウスは漸く美少女と巫女様のダブルショックから立ち直ったらしく、ふかーい息を吐いている。とりあえず落ち着くことにしたらしい。賢明だ。

「あーうん、ちょっとねぇ。神殿で襲われちゃったんだよね」

「はあ。……はあ？！」

はい？！

アルノーの素っ頓狂な声と同じくわたしも心中で叫んだ。え、え、え、そんなサラッとおっそろしいことを。ていうか。

「姫様を襲う？！　どこの狂人ですか！　国賊と変わりませんよ！」

「んーとね、アルノー。お願いなんだけどね、あんまり大声出さないでね」

「あ、す？？み、ません」

俯くアルノーの顔は青ざめていた。当然だ。だってわたし達が日々敬愛し、尊ぶこの方を、一体シュテンヘルツの誰が襲うと言うのか。神殿におわす二人の主のうちのひとり。聖下の半身。一目お会いしたいという狂信者ならまだ理解が及ぶけれど襲うなんて考えられない。そもそも。

そもそも、こんなに小さくて、優しそうな女の子を襲おうとするなんて。正気の沙汰じゃない。わたしは寒気を感じて少しだけ震え上がった。

でも、ユティ様は全く気にしていない様子で、ぽんぽんとアルノーの背中を叩いている。まるで癒すみたいに。

「本当にね、大したことじゃあないんだよ。ほら、もうすぐ生誕祭でしょ。お祭りだし、外からくるひとも多くて、警備も行き渡ってない……とか言っちゃ駄目だね。うん、まあ、本当の狙いは王陛下だよ。大神殿のたかが巫女一人殺したところでそれほど利益があるとは思えないし。とは言えちょっとごたついてね、焦ったイーナがわたしを吹っ飛ばしたんだよ。おかげでこの有様。容赦ないんだよねぇ」

「ばっ？？？？当たり前でしょう！　イーナ様だってきっと驚いて、必死でいらっしゃったのでしょう」

「うん。分かってるよ、ありがとうアルノー。だからね」

だからね、と高貴な方は仰った。ふんわりと黄金の双眸が柔らかに細められる。わたしはいっとき、呼吸を忘れた。

「だからね、わたしは早く戻らないといけないんだ」

ユティ様が、まるでちいさな聖母様のようだったから。

ピィ？？？？、とユティ様は流暢に口笛を吹いた。
口笛に流暢って言うのは少しおかしい気もするけど、本当に手慣れた様子で、それもよく響いてお上手だった。わたしは昔、結構練習するまで上手く吹けず、シュテルンを呼べなかったから、ユティ様のそれには思わず感嘆してしまった。難しいんですよねぇ。
と、不意に白い羽根が幾枚か空を舞った。きらきらと陽の光を浴びて輝き、ユティ様の真っ白さを余計浮き彫りにする。

「？？？？うん、いいこだね。ありがとう」

うたうようなお声でユティ様は舞い降りてきた白い鳥達に頬を寄せた。ピイピイ、と甘えるように彼らは純白の身体を寄せる。ユティ様は優しい手つきで鳥達の喉を撫で額を預け、無垢に微笑んだ。その笑みすらも真っ白に見える。白いひと、と最初に思ったのは、どうもかの方の醸し出す雰囲気のせいだったのかもしれない。
何事か、ユティ様が呟いた。するとかの方が広げられた両手の先、爪のあたりが淡い燐光を帯びる。神術だ。それも無詠唱の高等神術。そういえば巫女様にとって神術も芯術も、神々の眷属に働きかけることも、神々のお声を聞くことすら呼吸と同じ自然なことだと聞いたことがある。あれほど神々に愛されている、アルノーすら及ばない絶対至上の加護。この世で最も美しい魂の持ち主。この点においては聖下よりも度合いが強いらしい。……本当に、すごい方なのだ。

「ごめんね、お願い」

風にとけるような声で、シュテンヘルツの巫女様は囁いた。

瞬間、ばさりと鳥達翼を広げ、大きくはばたいた。瞬く間に上昇していき、巻き起こされた風にわたし達はきゅっと目を瞑る。う、髪が！　ばっさばさに！

「あちゃ、ごめんねー。大丈夫？」

ぱたぱたと可愛らしい足音に目を開けると、心配そうな顔でユティ様がわたしの髪を押さえてくれた。するすると手櫛をいれられる。？？？？？？う、わお。

「あわわわわあわすみません！」

「え、何が？」

本気で不思議そうだ。

別に身分がどうのをよく分かってない訳ではなくて、こういう行為が不敬に当たるとは考えていないのだろう。けども、わたしとしてはかなり心臓に悪い。ただ気遣いは嬉しかったので曖昧に笑うにとどめた。ユティ様は、善いひとだ。

「あの、本当に戻られるのですか？　そんなことがあったなら……」

「もー、何トチ狂ってるの、アルノー。大神殿にいない巫女なんて、巫女じゃないよ」

不安げなアルノーにあざやかに笑って、ユティ様はきっぱり断言した。この方は戻るのだ。誰が何と言っても。クラウスも心配そうに彼女を見たけれど、結局はただ、深い敬慕の眼差しで見つめるだけだった。わたしは少し考えてからぽんと手を打つ。

「あの、ユティ様。戻られる先は王宮ですか？」

「うん。神殿はたぶん標的じゃないから、大丈夫だと思う。各寺社

には今知らせを向けたから、多少強化も出来るだろうしね」
「じゃあ、わたし達と一緒に行きませんか」
ぱちくりと彼女は瞬いた。こてん、と首が横向く。……あまりの可愛さにクラウスが悶絶しているのが横目に入ってちょっとげんなりした。ポーカーフェイスを身につけろってんですよ、見苦しい。
「わたし達も王宮に向かっているんです。アルノーもそれなら心配じゃないでしょう？」
「いや、そんなことはないけどね……。でも、そっちの方がいいかな。どうなさいますか、姫様」
ユティ様は数秒躊躇ってから、ぱっと笑顔になってこくこく頷いた。
「うん、ありがとう。じゃあぜひとも一緒に行かせて欲しいな！」
はい、と微笑みながらわたしは内心グッと勝利の拳を握っていた。
??やった！　むさい男二人だけだった同行者に、美少女追加！

無力な聖句と祈り。

ユティ様はとても機嫌良さそうに白い布を目深に被って何事か呟いた。聞き取れた言葉が確かなら“エレンを煙に”だと思う。どういう意味だろうかと考えあぐねている間にアルノーがあっと声を上げた。

「それ、もっと早くやってくださいよ！」
「アルノーが色々言うからだよ。今からでも大丈夫だってば」
「あなたのその楽天思考どうにかしてくださいよ！」
「天下泰平の証でしょー」

……うーん、よく分からないけど、話を総合するに、今のは術なんだろうか。巫女様って不思議な祈言を使うって聞いたことがあるような。それかな。
クラウスと二人で首を傾げていると、ユティ様はぱっと笑った。あのね、と楽しげに続けられる。

「今のはね、身隠しの芯術でね、これで普通に大通りも歩けるよ。のんびり行こうね。買い食いもしようね」
「姫様！」

どうやら歓楽気分のご様子です。

＊

宣言通り異国の旅商から白いもっちりした食べ物に蜜がかかった菓子を竹串に刺して食べながら、わたし達は王宮へ向かった。不思議な食感だけどもなかなか美味しい。ユティ様はご満悦でお顔をきらきらさせていらっしゃる。クラウスがデレデレして多少気持ち悪い。アルノーはユティ様を守るようにさりげなくかの方の背後にいる。

「白蝋、梛枝、灰鈴、桃果」

うたうように不思議な祈言を囁きながらユティ様は輪舞を踏むように軽やかに歩いていく。ときどきそのお声は止まって、柔らかくおしゃべりする。漸く緊張が溶けてきたらしいクラウスが答えては問いを投げかける。アルノーとわたしはこっそり苦笑し、友人の必死な様子を腹の内では大爆笑していた。だってクラウスが借りてきた猫みたいに大人しく、忠犬みたいにユティ様にまとわりついている。可笑し過ぎる。

祈言、というのは術を使う時に詠唱の言葉を指す。聖句とは少し違う。聖句というのはお祈りの言葉や、神様からいただいた言葉、

それから時には儀式に用いる言葉のことで、だいたい普通の詠唱では短縮されない。巫女様や聖下、芯師の人達はできるかもしれないけれど、大抵のひとは難しくてまったく発動しない。聖句というのはとても神聖なものだから。

対して祈言は神様に乞う言葉だ。昔の人々が少しずつ編み出していった神々やその眷属に働きかける言葉。そうして力を借りて事を成す。

これも詠唱破棄や短縮は難しいとされる。けれどもできなくはない。現に芯師の人々は大抵簡単な祈言は短縮する。言葉にしている時間が面倒だし、無駄だからだ。

ただ、ユティ様が今使っていらっしゃるような祈言は、どうにも毛色が違うように思える。異国の言葉のような、不思議な音。

……そういえば。

そういえば、お父様はそういう昔々に捨て去られた祈言や古詩を発掘したり、研究なさっていたりするのだった。

ちなみに古詩は祈言が織り込まれた『力ある物語の欠片』のことだ。戒めを盛り込んだ古い詩でもあるけれど、本来の原文、というよりも書かれた原文の文字は思念や力を持つらしい。教科書に載るとただの古詩になってしまうのだけど。

古詩というのは大抵韻がある。そしてその中には何らかの物語ないしは意味が描かれる。祈言よりもずっと不思議なものらしい。

と、いうのはお義兄様に聞いた話だ。あのひとは古詩が専攻だったから。

そんなことをつらつらと考えていると王宮に辿り着いていた。澄み渡る空の下、傲然と佇む白亜の大宮殿。我らが王陛下のおわす場所。

白い塔が右端にあり、複雑な紋様が彫り込まれ、うっすらと金色の線で上品に彩られている。

……ふわあ。

何度見ても圧倒されるシュテンヘルツいち巨大な城の門前でひそりと感嘆の息を洩らす。綺麗なものは何度見ても心穏やかにしてくれる。美人は三日で飽きるなんて、そんな勿体ないことあるもんですか。……性格に難ありだったら、まあ、分からなくもないけども。お義兄様とかお義兄様とかお義兄様とか。

わたし達は城門の前で長い槍をどんと構えてものものしく立っている門番さん達に近付き、用向きと通行証を見せる。アルノーは顔を覚えられているのを良いことに、男二人は手ぶらしく、門番さん達はちょっと苦笑いした。わたしも顔は知られているけど、一応持ってきたのに。なんとなく釈然としない。

「ん、そちらは……司祭様、ですか？　申し訳ありませんが、通行証は、」

やっぱりユティ様のお姿は司祭様に見えるらしい。真っ白な布を目深に被って顔の見えないかのひとに、門番さんは心苦しそうにそう言いかけ、ふと口をつぐんだ。

ユティ様がくすりと笑ったからだ。

「……ま、さか」

お年を召していらっしゃる門番さんの方が、呆気に取られたように顎を落とす。ユティ様は少しだけ布を上げて、そのご尊顔をさらした。

「こんにちは、今日の当番があなただなんて、運がいいな」

ぱっと聞くと下手な口説き文句に聞こえなくもない台詞をさらりとのたまい、ユティ様は固まる門番さんに向かって「通行証ないんだけど、入っても大丈夫かな」と朗らかに尋ねた。門番さんはもち

ろん、全力で頷いていた。
……さすが巫女様。

さて、とうとう王城についてしまったわけで。
だからわたしは三人と別れなくちゃいけない。たぶん、三人とも、尊い方々のところに行くのだろうから、お父様の用事で来たわたしとは、全く違う方向になる。広大な王城はわたしなんかが把握できない、というよりも一般人は把握しちゃいけないくらい区分けされていて、少なくとも研究室のある棟と、王陛下方がいらっしゃる場所は天と地ほどの差があるのだ。
（本当は、ご一緒したいんですが）
でも、わたしじゃ足手まといだ。クラウスも、まあ、あんまり役に立たなさそうだけど、どっちにしろ彼はアルノーと来て、それからフリーダに会いに来たのだから、同行しないわけにも行かないだろう。悔しいな、とちょっと思う。面倒事はぜんぜん、まったく、これっぽっちも好きではないのだけども、それでもユティ様や陛下が危ないかもしれない、って時に、わたしはお父様のお使いを果たすしかできない。わたしはこれでもシュテンヘルツの人間なのだ。それってものすごく、歯がゆい。
お義兄様なら、とこういう時、思う。
お義兄様なら一体どうしただろう。いつも変態で変態で変態なお義兄様だけど。結局、わたしはお義兄様に頼り切っている。……依存している、と言っても良いかもしれなかった。もしお義兄様がいらっしゃらなかったら、わたしはもっと駄目になっていたかもしれないから。
わたしはユティ様の手をぎゅっと握ってから、名残り惜しくも離

した。

「あんまり、無理なさらないでください」

「うん、あんまりね。だいじょーぶだよ、ありがとう」

ユティ様はやっぱり天使みたいに無垢に笑って、アルノーとクラウスとともにわたしと反対側に消えていった。わたしはその背に向かってつたない聖句を唱えてみる。あなたが無事でありますように。そういう意味の『慈愛』の聖句。

「……」

柔らかな円を描いて神術が成る。それは弱々しく惑ってから、すっと三人が行った方向に溶けていった。効果の程は、あまりどころかかなり、期待できない。

わたしは肩を落として、研究室に向かう渡り廊下へと走り出した。

小休止　ヨハン曰く、

彼の名をヨハンと言う。

自分のその、ありふれたどころか右を向いても左を向いてもでくわすような地味な名前を、彼はとても気に入っていた。それは何故か。覚えやすいからである。次に続く、父から受け継いだ名が舌を噛みそうなほどこめんどくさいものだから、その思いはひとしおだった。

それにこの牧歌的な名は大抵の相手にもすんなりと覚えてもらえる。新たな息子も妻も、見事一発で覚えてくれたものだ。覚えてもらえる、というのはつまり、二度三度と聞き返される面倒が少ないということなのである。

「博士（ドクター）、この壜はどこに置いとけばいいんすかね」

うずたかく積まれた書物の山に狭間を作り、なんとかそこに収まってとっくり文字を追っていた彼は、無造作にかけられたその声に危うく反応しそびれた。数秒して、ああ、うん、うんうん、と腑抜けた声を出す。

「なんだっけ、それ」
「アリーセの七（ズィーベン）、ハイネの枯葉と蜜を混ぜた青いやつです」
「毒羽根の蓋？」
「はい（ヤー）」

とろとろと、知らず瞼が落ちてくる。ああ、今日も陽気が気持ち良いなあ。我が麗しき細君（スーセ）は今日も元気に発狂していたし、うん、今日も今日とて平和だなあ。

「博士、」
「ん、ああ、ごめんごめん。眠くなっちゃってねぇ」
「俺も眠いっすよ。ここ数日ずっとこもりっきりなんすから」

はああ、と重いため息が聞こえた。おや、とヨハンを記憶をほじくり返す。おや、こもりっきり？　彼が？　ということは、自分も一緒にこもっていたということだ。……。……？　何か違和感を覚えて首を傾げる。
……うん？　つまり、自分が家族にあったのは、今日ではないのだろうか。

「ティーロ、私もこもっていたかな」
「何寝ぼけたこと言ってんすか。当然でしょ。俺ひとりでこもってたらつまみ出されますよ」
「……。そう？　あれ、じゃあ、ところで。私たちは何日こもっているのかな」
「さあ。正確には覚えてませんが、少なくとも七日はこっから出てないっすね」
「……そうなの？」

あざやかな夜の色の瞳が、心底呆れたようにヨハンを見る。腕までまくった袖にはところどころ、怪しげな色合いの液体がこびりついており、仮にも王宮内に設置された研究室で、彼は裸足で歩いていた。まったくイイ性格だなあ、とヨハンはまったり助手を見つめ返す。ティーロは嫌そうに口を曲げた。

「さっさと指示出してくださいよ。これ、適当にどっか置くわけにも、ずっと持ち続けてるわけにもいかないんすから」
「ああごめんごめん。うん、そうだねぇ、じゃあその銀二十七の棚

に置いてくれる？　うんうんありがとう」

さっさと壜が置かれるのを確認してから、ヨハンは書物の山の下から古ぼけた安紙を一枚引き抜いた。開けっ放しのインクにペンを漬けて、がりがりと紋と描き、つらつらと祈りの言葉を書き連ねて、最後に中央から下へ、親指を擦り付ける。ぱん、と両手を叩き合わせ、ヨハンはなめらかに口を開いた。

「おいでませ、灰燼の姫君。ユーリヒとユーディト、エルンストの焼け落ちた王に乞い奉る。どうぞこの新たな育みに豊かなご加護を」

ぽう？？？？と合わせた手のうちから、光が溢れた。

密やかな、銀の鈴が響き合う音がする。しゃん、とどこか冷たいそれが彼の額に迫るよう、少しずつ近付いてくる。ティーロが軽く目礼するのを横目で捉え、彼は少しばかり、微笑んだ。のほほんといかにものどかに。

「お久しゅうございます」

是（うむ）、とたわんでしゃがれた声が頷いた。ヨハンは下げた頭を持ち上げる。見上げた先、ふわふわと宙に漂う、高貴な少女の姿をした、けれども人ではない、？？すなわち神の一柱が、片頬を微かに緩めていた。花にも似た灰がその空気中に溶ける髪にふりかかり、片目はぼやけてゆらめいている。まるで弱い火のようだ。折れそうに細い足首に連ねられた銀色の輪がしゃらん、と鳴る。その指先すらとけて、文字通り漂っていた。

ふらり、ふらり。ゆらり、ゆらり。

煙の如く。

？？獣の性（さが）を持ち、灰の花をまとい、加護の意志を戴く女神灰燼（アド）の姫君（ルフィーネ）。

『用は何じゃ、愛(めぐ)し子。妾がいつでも眠いとお前は知っておろう』

気怠い言葉を受けたヨハンは「ちょっと失礼」と軽く手で謝り、散らかった棚の奥からひしゃげた袋を引っ張り出した。それを大切に持って、いそいそと灰をかぶる神へ差し出す。ぴくり、と美しい灰色の眉が寄る。じっとりとした視線で睨まれた。青くなるティーロと違い、ヨハンはただにこにこと微笑う。

「どうぞ、先日精製したばかりの花菓子です。虹神(イリス)殿とどうぞご一緒に」

『……混ぜた花は何じゃ』

「アリッサムです。白を選びました」

ふん、と彼女は鼻を鳴らした。溶ける指先がくいっと動き、袋の中身が宙に浮く。ふよふよと自身と同じように漂うそれをとっくり眺めたかと思うと、薔薇を搾ったように赤い唇が、菓子のうちのひとつを、ぱくりと呑み込んだ。

ティーロは少女の姿の神の様子を、はらはらしながら見守った。恐ろしい。まったく、博士ときたら命知らずだ。げっそりとそんなことを思う助手のことなど全く気にしていない風の男は、神の冷たい一瞥を受けてももちろんどうじない。

『……で』

「はい」

『今度は何ぞ』

ヨハンはにっこりと笑った。徐々にはっきりしてきた本日の記憶を笑顔の裏でほじくり返す。そうそうそう、今日は確か、夢を渡ってあの子におつかいを頼んであったのだった。すっかり忘れていた

けれど、恐らくそろそろ頼んだ全てをきっちり買い集めて持ってきてくれる頃だろう。本当にうちの娘は良い子に育ったものだ。次に帰るときまでに、何か素敵なお土産をこしらえておかないとなあ、と当の娘からすれば迷惑極まりないことを考える。

そうして、むっつりと待ち構える神に彼は誠心誠意感謝を込めて、

「ありがとうございます。それでは暫く、うちの可愛い可愛い可愛い可愛いグレーテルの護衛をしてください」

お願い申し上げたのだが、何故か彼女は珍しくも苛ついた顔で舌打ちし、勤勉な助手は目を逸らした。

最終的に是と頷き、ひらりとどこぞに神が消えた後、ヨハンはうきうきと部屋の片付けを始めた。それを手伝いながら、ティーロは何度も何度もため息をつく。

「博士、もう無理っすよ。どーせ間に合いませんって」

「まあまあもうちょっとだから！　ふふふ、ティーロ、君もあの子に会うのは久々だろう？」

「や、五日前くらいには会いましたよ」

「気のせい気のせい」

何故。

るんるん、と鼻歌まで始めた上司にげんなりする。まったく、こ

のひとはいつもこうなのだ。家族と対する時は大抵、無駄にテンションが高い。いつも以上に頭のネジが跳ね飛んだ様子で接するものだから、哀れな彼の娘はいつも額に青筋を立てている。……これさえなければ、あの子もまだ心中穏やかでいられるだろうに。

「ティーロ、仕方ないだろう？　家族に会えるとついはしゃいでしまうこの気持ち！」

「いや分かりませんから。てか、それで奥さんに逃げられても知らねっすよ」

「大丈夫！　彼女はもっと変だからね！」

「……自覚……あったんすね……」

でも変えないんすね……という突っ込みは、寸でのところで呑み込んだ。僅か扉三つ分先から、足音が聞こえたのだ。これはおそらく？？？？

「ああ、くるね」

ふわり、とヨハンは蕩けるように頬を緩めた。細まった目は皺がよってとことん穏やかだ。だからか、余計先程の神との契約が気になってくる。

「あの、お嬢さん、これからなんかあるんすか？」

この男は娘を守るよう神に乞うた。

神は是と頷いた。

つまりは、彼の娘に何かがある、ということなのだ。

他人事ながら微妙に心配になってきてそう尋ねたティーロの懸念

を吹っ飛ばすように、ヨハンは曇りない笑顔で助手の背中をぶっ叩いた。そりゃもう容赦なくばっしばしと。痛ぇ。

「うちの娘はなんだかんで良い子だからね！　これは仕方ないことなのさ！」

「いやだから意味分から」

「ああ、ほうら、やってくるよ！」

ティーロは再び、口を噤んだ。積まれた書類で下方の見えない扉を見る。こんこん、といかにも適当に叩きました、というノックの音。

返答を待たず、がちゃりと扉が開かれる。

「やあやあやあ、いらっしゃいグレーテル！　おつかいご苦労さまだね！」

沈んだ顔のまだ幼さの残る顔立ちをした少女を、その父親が至って陽気にまさしく空気をぶった切る勢いで出迎えた。

小休止　ヨハン曰く、（後書き）

こっそり：

スーセは「可愛いひと」の意で、細君のことではありません。いや、あの、ほら、「可愛い子猫ちゃん！」の勢いです。

アドルフィーネは「灰燼の姫君」の訳語ではありません。検索かけるとネタバレか、も、しれ……ません。

イリスさんは実在の人物・宗教・団体とは関係ないよ！　これはフィクションだよ！

そして前回更新より大分遅くなってしまってすみませんでした……！（ガクガクブルブル）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8542t/

ヘンゼルお義兄様が最近とみに変態でいらっしゃることについてわたしは一体

2011年10月24日18時34分発行